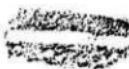
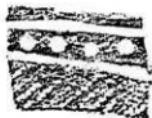


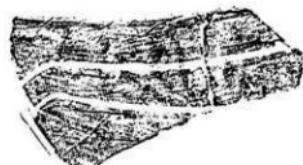


## 小杉町白石遺跡発掘調査概要



1992年3月

富山県小杉町教育委員会



## 例　　言

1、本書は有限会社河上金物店の新工場建設に伴う造成に先立つて実施した富山県射水郡小杉町鷺塚763番地外に所在する白石遺跡の発掘調査概要である。

2、調査は、小杉町教育委員会が主体となって行い、一部の調査を民間考古学機関である山武考古学研究所の調査協力を得た。

なお、山武考古学研究所が調査協力した箇所の発掘調査報告は、平成4年度に別途発行される予定であるため、本書への記載は除いた。

3、それぞれの調査期間、発掘面積、担当者は次ぎのとおりである。

試掘調査：平成2年12月14日～12月22日 延べ6日、発掘面積 約6,000m<sup>2</sup> 原田義範

本 調査：平成3年 7月19日～8月31日 延べ24日、発掘面積 約 236m<sup>2</sup> 桐谷 優（山武考古学研究所）

　　：平成3年 9月 2日～11月30日 延べ56日、発掘面積 約1,850m<sup>2</sup> 上野 章

4、調査事務局は小杉町教育委員会に置き、平成2年から平成3年6月までは事務を主任金山秀彰が担当し、社会教育課長荒川秀次が総括し、平成3年7月からは生涯学習課長盛田寿子が総括した。

5、調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導・協力をいただいた。また調査から概要書の作成にあたり、次の方々から教示を得た。記して謝意を表したい。

狩野誠・酒井重洋・久々忠義・高梨清志

6、遺物整理は、各調査担当者が行い、本書の作成は平成2年度を上野・原田が行い、平成3年度を上野があたった。

7、遺構番号の頭の分類番号は次のとおりである。

SD：溝、SK：穴、SE：井戸、P：柱穴・柱穴状ピット

### 目　　次

	日	次	図	
I 地形と周辺の遺跡		1	第1図 地形と周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯		2	第2図 試掘調査と発掘区割図	3
1 調査に至るまでの経過		2	第3図 試掘調査の出土遺物	4
2 平成2年度の調査		2	第4図 試掘調査の出土遺物	5
3 平成3年度の調査		2	第5図 繩文時代の調査区と土層（折込み）	
III 調査の概要		2	第6図 繩文時代の出土遺物	7
1 試掘調査		2	第7図 繩文時代の出土遺物	8
2 平成3年度の調査と層序		6	第8図 繩文時代の出土遺物	9
3 東地区の調査		6	第9図 遺構図（折込み）	
(1) 繩文時代		6	第10図 SD 02～08遺構図	11
(2) 弥生時代以降		9	第11図 SD 11・15・16・19遺構図	12
① 遺構		9	第12図 SD 17・18遺構図	13
② 遺物		16	第13図 SD 31～37外の遺構図	14
4 西地区		26	第14図 SD 33・柱穴外遺構図	15
IV まとめ		26	第15図 SD 08～19、31・32出土遺物	17
1 繩文時代		26	第16図 SD 32出土遺物	18
2 弥生～平安時代		28	第17図 SD 34・SE 36出土遺物	19
3 中世		28	第18図 SE 36・37・柱穴出土遺物	20
参考・引用文献		28	第19図 柱穴出土遺物	21
図 版			第20図 調査区出土遺物	22
（表紙：出土した繩文時代の土器）			第21図 調査区出土遺物	23
			第22図 調査区出土遺物	24
			第23図 射水平野の繩文土器と遺物分布図	27

## I 地形と周辺の遺跡

白石遺跡は、射水郡小杉町鷲塚・白石地内の標高1~2mの射水平野に立地する。射水平野は、庄川と神通川に挟まれた地域で、両河川及び間の下条川や和田川（神楽川）・鐵治川等の中小河川の運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野である。この平野は、今から約6000年前の縄文時代の海進期には、現在の標高5mの等高線まで海だったと言われており、その後、射水丘陵に源を発する中小河川が丘陵を侵食し、運搬してきた土砂により、陸地化し弥生時代には、海岸線が現在のラインに近くなったとされる〔北林1956〕。しかし平野のいたる所に小さな渦や沼が点在する低湿地で、弥生時代になって自然堤防上や砂洲を利用し射水平野での人々の生活がはじまったことが明らかになっている。

白石遺跡は、下条川と新堀川に挟まれた射水平野の中の水田に立地し、海岸から約4.5km内陸に奥まった所である。この下条川流域は、大正14年に始まる河川改修や射水平野の土地改良事業が行なわれるまで、大きな降雨のたびに低湿地の河川や用水があふれ、氾濫を繰り返し洪水の被害にみまわれた地域であった。改修以前は、曲がりくねった川で、現在では直線状となり、川幅を広くし川底も深くして射水平野の乾田化がはかられている。

文献によると、下条川以東の戸破・手崎・小白石などには、平安時代から室町時代末までの約500年にわたって倉垣庄が存在していたと云われており、庄内には 加茂社の末社が二十社前後と多く分布している。これらの末社はいずれも近世以前の親村に限られ、その勧進は古く、南北朝期か室町期初めと考えられている〔木倉1965〕。

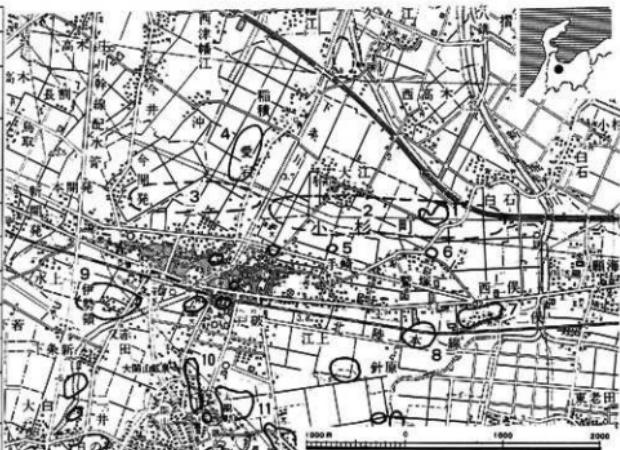
下条川流域を中心とした周辺の遺跡には、弥生時代末の遺跡が多く発見されてきている。上流からみると二の井や大臼にかけて存在する遺跡があり、その下流約1kmに平成3年に本調査され多量の土器が出土した伊勢領遺跡がある。

更に白石遺跡までの間には、河川改修時に地下1~2m深さから弥生土器の出た高寺遺跡が報じられている。

戸破若宮遺跡からは、弥生時代の井戸や溝などの遺構が調査されている。また奈良・平安時代や中世の遺構・遺物の存在も先の遺跡を含め、流域で確認されている大半の遺跡から見つかっている。

このように下条川流域の平野では、遺跡の分布状態から弥生時代以降古代・中世・近世にかけての人々の生活の足跡がうかがえる。

No	遺跡名	主な時代
1	白 石	弥生・古墳・中世
2	仮称新幹線分布調査No4	弥生～中世
3	仮称新幹線分布調査No3	古墳～中世
4	愛 岩	奈良・平安
5	戸 破 若 宮	弥生・中世
6	鷲 塚	古 墳
7	西 二 俣	弥生・古墳
8	針 原 東	弥生・中世
9	伊 势 領	弥生・奈良
10	中 山 中	弥生・古墳
11	三 谷 弥 生	弥 生



第1図 地形と周辺の遺跡

## II 調査に至る経緯

### 1 調査に至るまでの経緯

国道8号線に接した小杉町鷺塚・白石地区の水田地帯に、有限会社河上金物店の工場進出計画が具体化したのは、平成2年4月である。その敷地面積は、約53,400m<sup>2</sup>である。

同社は、金物のほかに近年鉄鋼製品の供給をはじめたが、需要の活発化により、一大流通加工基地として重仮設設備工場の新設方針が小杉町に示された。新工場では、鉄鋼の清掃に加え切断や鉄筋の曲げ加工なども予定している。

建設計画地は昭和62年に小杉町の企業団地候補地として上がり、某会社の工場立地の打診もあったが、埋蔵文化財の存在から工事計画との調整が困難なことから話は見送られた。

また、小杉町では平成2年度に計画地の西側を通る町道417号線の拡幅工事を予定していた。路線を含めた一帯には周知の遺跡である仮称・新幹線分布調査No.4遺跡が存在することから、7月に路線敷きの試掘調査を実施し、遺構や遺物の検出された部分の本調査を引き続き進められ、平行して町道の建設が行なわれた。

平成2年4月に本格化した河上金物店の新工場計画は、大型開発事業に該当し、小杉町では開発に伴う各種関係法令の手続きや事前協議の窓口を商工振興課が担当し、富山県との連絡調整に当ってきた。会社では、小杉町・富山県との調整を図りながら、秋の収穫後に用地の取得が進められた。

### 2 平成2年度の調査

小杉町教育委員会では、建設計画地に周知の遺跡が存在するため、まず遺跡の範囲・内容を把握することを目的として、平成2年12月14日から12月22までの6日間にわたり、試掘調査を実施した。この結果、遺跡は東・西地区に分かれ、二地区を合わせた遺跡面積が約22,900m<sup>2</sup>の広大な広がりをもつことが明らかになった。

### 3 平成3年度の調査

平成3年2~3月には、小杉町教育委員会と会社との間で試掘結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて種々検討が行なわれた。協議の結果、当初の建物配置案で工事を進めること。遺構の密集する遺跡東地区の東端は若干の盛土をしたうえ調整池として残す。北側の加工工場と門型クレーンは今後の増築スペースとし、当面は資材置場として利用するため、本調査は増築時に行なうことなどが合意された。従って今回の本調査対象地は、南側の門型クレーン(土間)の基礎部分と重仮設機械設備工場の建物敷地及び搬入口とし、取りあえず実施することになった。

この内、南側の県道に面する搬入口2箇所の本調査は、工事の緊急度から最初に着手することになり、民間の調査機関の調査員の協力を求め、7月23日から8月31日まで延べ24日間の発掘を行なった(図版第1)。引き続き、建物敷きの調査に9月3日から11月30までの延べ56日間あたった。

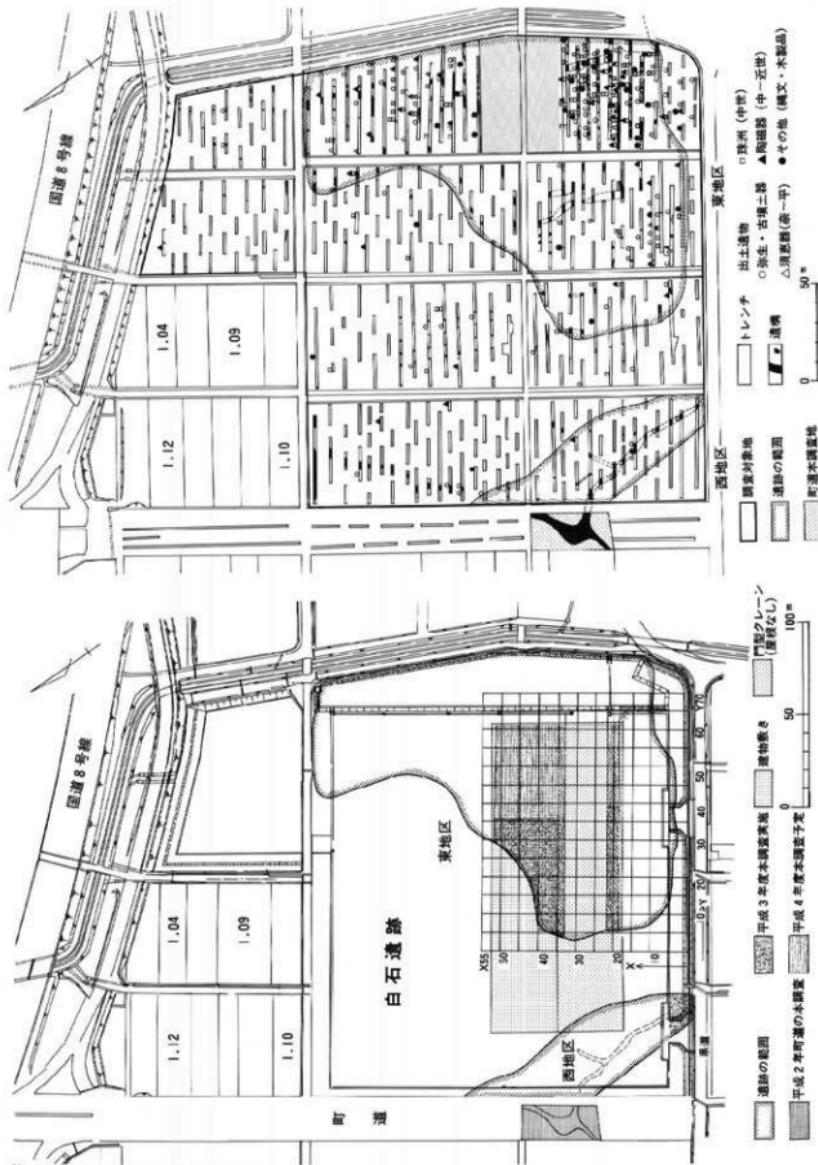
さて、工事の進行に伴い、建設用地の地区内排水路敷きの掘削も遺跡内で進められ、遺跡の保存に支障が出るとみられる箇所については、急速、工事時に立合いを行なった。構が確認された箇所は、すぐに本調査を実施し対応した。遺跡の西地区は搬入口に続く部分であり、7~8月の調査により溝が検出された北側の部分数m<sup>2</sup>の発掘であった(第14図下)。また遺跡の東地区は南西端近くにあたる約60m<sup>2</sup>を対象として本調査にはいった。

調査面積は、門型クレーンの基礎部分約420m<sup>2</sup>、建物敷きが約1,370m<sup>2</sup>の合わせて約1,850m<sup>2</sup>である。

## III 調査の概要

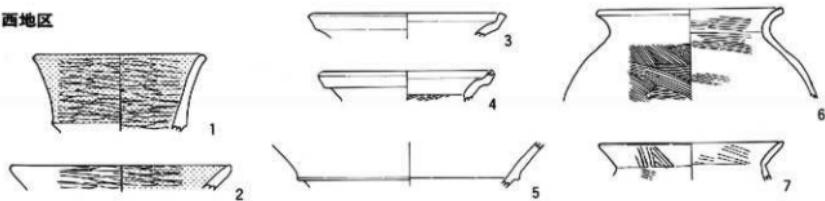
### 1 試掘調査(第2の上、4図、図版第1・5)

試掘は重機を用い約1m幅の試掘溝を数m間隔に掘り、表土下20~40cmにあたる遺構面の淡灰褐色土で遺構の有無を確認し、遺物・遺構の存在から遺跡の範囲を調べた。その結果、遺跡は町道に接した西地区(約2,600m<sup>2</sup>)と、約50

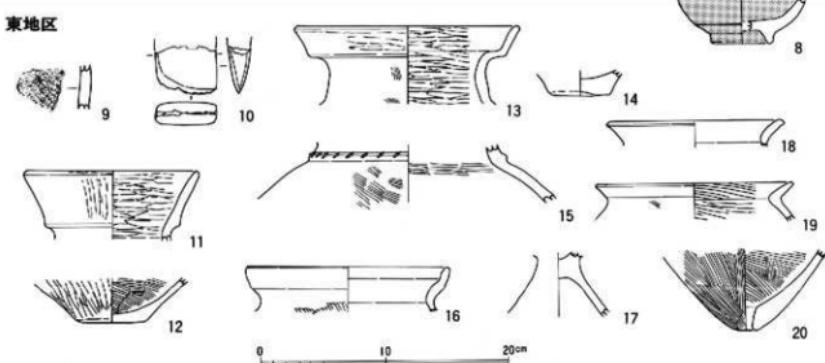


第2図 試掘調査(上)と発掘区割図(下)

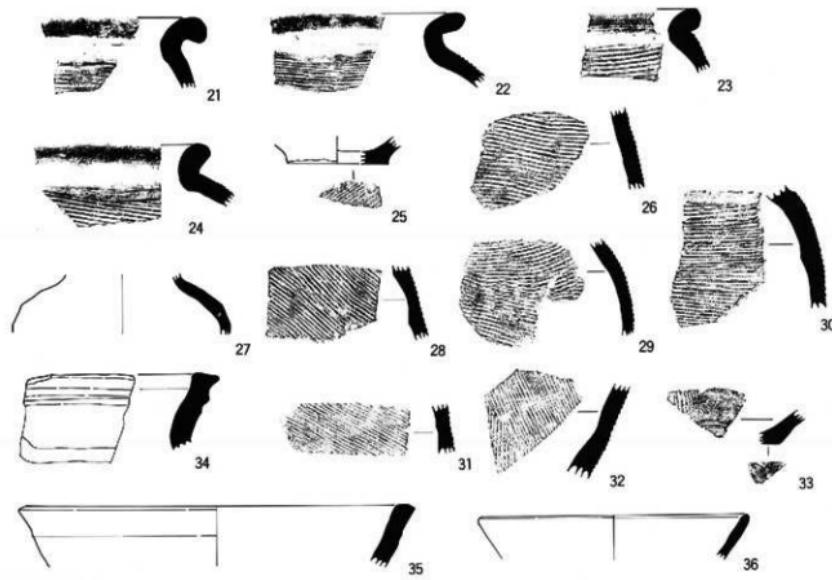
西地区



東地区

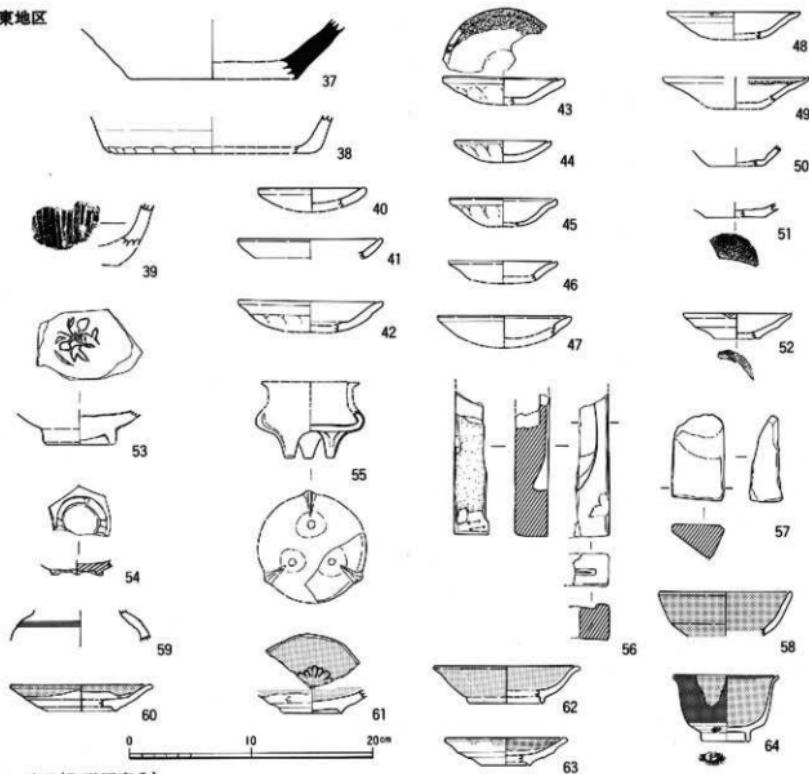


0 10 20cm

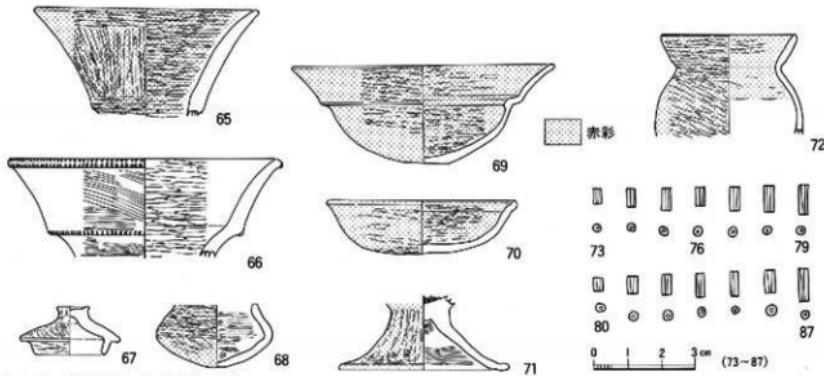


第3図 試掘調査の出土遺物 (3)

東地区



西地区(町道調査分)



第4図 試掘調査の出土遺物 (1/4)

m離れた東地区（約20,300m<sup>2</sup>）の合計面積が約22,900m<sup>2</sup>の広大な広がりであった。

西地区は、町道敷きの調査で検出された古墳時代初めの溝を中心とするもので、南方向に長く伸びていると推定される。試掘の遺物では弥生時代末から古墳時代初めにかけての壺や甕などが出ている。

また東地区では造構の密度が東側に寄る程高くなり、柱穴状の小ピットや溝などから中世の集落の存在が明らかになった。出土遺物では、弥生時代末頃の11～14の壺、16・18・19の甕、20の有孔鉢がある。わずかに9・10の縄文土器・石斧がみられる。中世の遺物には21～37の珠洲があり、珠洲Ⅱ期の21～22の甕、36の片口鉢や、珠洲Ⅳ期の23・の甕と35の片口鉢、16世紀にはいる越前の甕縁部、40～52の上師質土器、53・55の青磁碗と香炉、54の白磁、56の石硯、57の砥石がある。時期は13～16世紀と幅をもつ。60～64は近世以降の陶磁器である。60・61・63は越中瀬戸の小皿、62は、16世紀頃の美濃瀬戸の小皿、64は小杉の印を押した復興小杉焼の碗で大正時代に含まれる。

なお、65～87は町道の調査時に溝内から出土したもので、古墳時代初め（古府クルビ期）の65・66・68・72が甕、67が壺、69・70の鉢などであり赤く彩色されたものがある。73～87は碧玉を石材とした管玉である。

## 2 平成3年度の調査と層序

今回の調査区、東地区で検出した造構は、溝13、素掘りの井戸2、柱穴及び柱穴状ピットなどである。東端の用水敷きでは室町から戦国時代にかけての集落跡の一部が明らかになった。また、重伝設機械整備工場の廻物敷き調査区では、造構検出面の下層に縄文時代中期の遺物包含層が広がっていた。西地区的検出した造構は、弥生時代木頃の溝1条であった。

遺跡の層序は半野に立地するにもかかわらず、東端の用水路敷きと調査対象の遺跡の中央から西側とは少し異なる。東端ではI層が水田耕作土の暗灰褐色土（約20cm）であり、II層が暗灰茶褐色粘質土（10～40cm）で、III層が灰白色粘質土であり、次いでIV層に黒色粘質土となる順序で堆積し、南東隅ではIII層上面から造構が掘り込まれ、III・IV層を欠く北寄りでは、V層の淡褐色砂質土が造構の掘り込み面となる。

遺跡の中央から西側では、I層が水田耕作土の暗灰褐色土（約20cm）であり、所により水田の床上の淡灰青色粘質土がみられ、II層に黒褐色粘質土（5～10cm）があり、III層の淡褐色砂質土（15～20cm）、IV層に淡灰色砂泥土（20cm程）、V層に淡茶褐色砂泥土の順序で堆積している。造構の掘り込み面がIII層であり、III～V層は縄文時代の包含層となっている。

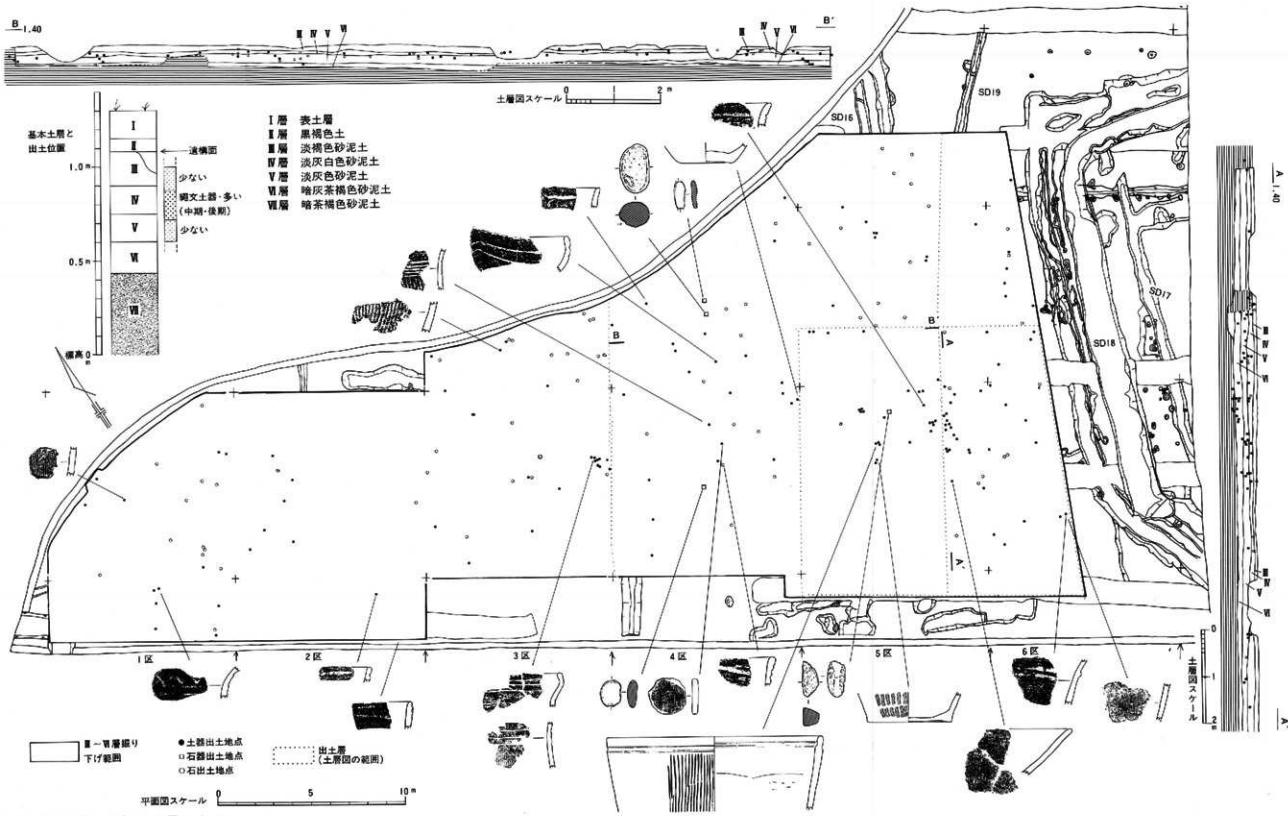
## 3 東地区的調査

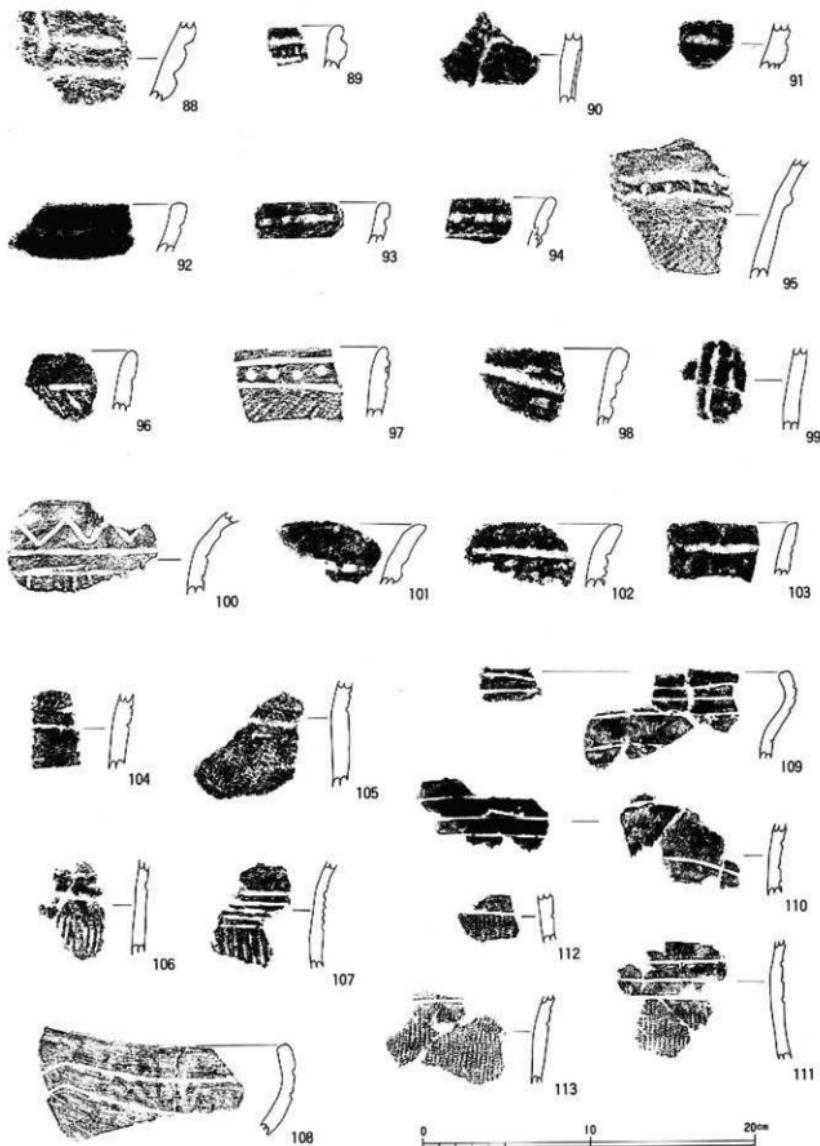
### (1) 縄文時代（第5～8図、図版5・6）

縄文時代の遺物は、造構検出面や造構の掘り込み面及び試掘トレンチから断片的に見つかった。そのため、5図に示すようにX33～45Y6～35区の約1,250m<sup>2</sup>の面積を、造構の記録後に淡灰褐色土のIV層を平均30cm程掘り下げた。遺物は、全般にIII・IV層中5～15cm程掘った深さに多くなり、その上下では包含が少なくなる傾向にある。遺物の集中地点は、特に広い範囲に及んでいる。III・IV層からは土器・石器の周囲から0.5～2cm程の細かい炭化物が多く検出され、その他に、幼児の人頭大の大きさから数cmの大きさまでの円礫が点在していた。上器の器面には厚く炭化物が付着する。上器の時期は中期後半の古串田新式（88～91）・串田新II式〔小島1974〕（92～99）、後期初めの岩崎野式〔柳井1976〕（100～103）、気屋1・2式〔米沢1989〕（107～113）までの各時期の上器が約70点出土している。

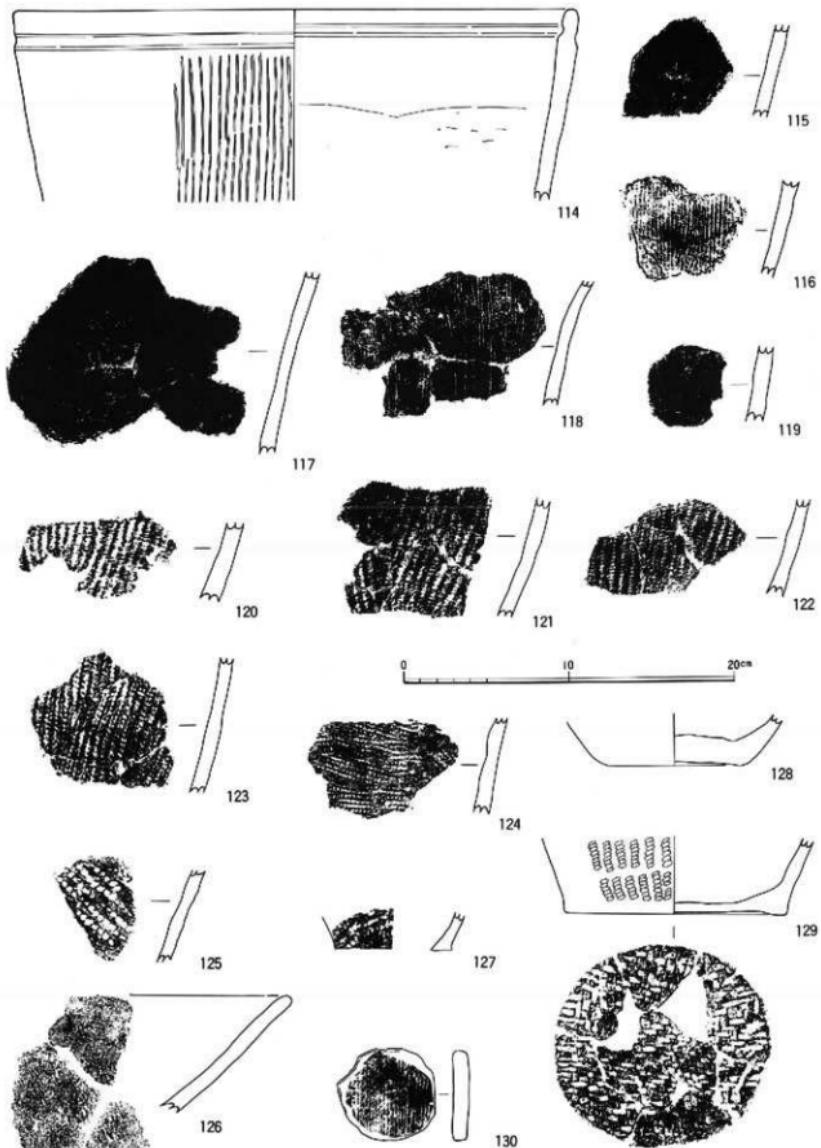
古串田新式の88は、平行な幅広の半隆起線文と縦方向に弧状に描くものである。89は隆起上を鏽刻みするもので、90は方形に区切られた無文部に沿って隆起を配し刻む。串田新II式の92～94LII縁部が外返しないもので、95は隆起をもつものあり、96は斜めの沈線を付け、97は列点を沈線間に入れる。114～119・130は貝殻条痕文、または条線文をもつもので、114は口縁部の内外面に1条の沈線を巡らせる。125・124は斜位の縄文を付ける。

岩崎野式の100～103は、口縁部が薄くなり外反するものであり、100は平行な沈線の上に蛇行沈線を引いている。

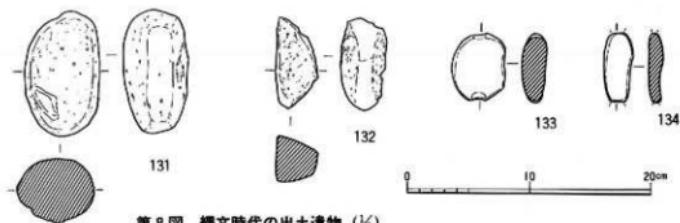




第6図 桶文時代の出土遺物 (1)



第7図 桐文時代の出土遺物 (1/2)



第8図 繩文時代の出土遺物 (Y)

気屋式は口縁部が丸く内済し、108は波状沈線を引き、107は沈線内に押引痕を残す。109~113は同一個体でまとめて出土した深鉢である。内済した口縁部及び頸部に平行沈線を引き、胸部にはR Lの繩文を転がしている。128の網代鉢の底部は、2本越え2本潜り1本送りのものである。浅鉢126は器高の低いものであり、130は円盤形土製品である。石器は4点がある。131・132は輕石製品で、131は梢円形をする。133は両端を打ち欠いた石錐で、134は両端に敲打痕を残している。

## (2) 弥生時代以降

### ① 道構 (第9~14図、図版1~4)

搬入口部分 (X 4・5~Y 32~40)

S D01の溝1条が検出されている。幅約1m、深さ50cmの溝内から數十点の木製品が出土しているが、土器がなぐ時期は特定できない (図版第1の6・7)。

門型クレーンの基礎部分・建物敷き (X18~52 Y5~39区・第9~12図、図版第2・3)

道構は溝を中心としたもので、「L」の字状や「コ」の字状、或いは四角に溝を巡らせているもので、道構の性格は、現段階では明らかではない。道構からの出土遺物もきわめて少なく、掘込まれた時期の断定は難しい。この溝からの最も新しい遺物は中世の珠洲であることから中世に属する可能性がたかく、溝の性格・細かい所属時期の帰属は、平成4年予定の東側の調査を待ちたい。

S D02 (第10図) ×20 Y15~24区にかけて位置する。溝の規模は、幅が1.5~2.0mあり、深さの平均が30cmあって、西端20m程は深さが50cm程有している。溝の方向は東西方向に一直線にのび、長さが約20mあって東端は近世の溝のS D05に新しく切られている。遺物は土師器数点が覆土から出土している。

S D03 ×21 Y25区付近に位置する。溝の幅は約0.3mで、深さが15cm程の大きさをもち、出土遺物はない。

S D04 (第10図) ×21 Y21~25区に位置する。溝の幅は約0.35mで、深さが10cm程で東側では深さが一定しない。溝の方向はS D02と同じく東西に長く伸びる。出土遺物は土師質土器片2点が出土している。

S D05 (第10図) ×19~22 Y24~25区に位置する。溝の幅は約0.3~0.9mで、深さが20cm程であり、覆土から近世の越中瀬戸が出土している。溝は北東方向に長く伸びており S D19の延長方向にある。

S D06 (第10図) ×19 Y12~13区に位置する。溝の幅は約1.3m、長さ2m以上で、深さが45cm程である。出土遺物はない。

S D07 (第10図) ×34~35 Y6区に位置する。溝の幅は約1.2m、長さ4.5m以上で、深さが10cm程である。出土遺物は弥生時代末頃の土器が数点ある。

S D08 (第10図) ×34~35 Y5区に位置する。溝の幅は約1.3mで、長さ4m以上の規模をもち深さが20cm程である。覆土からは繩文土器・弥生時代末頃の土器、中世の珠洲細片が十数点があり、底面から珠洲が検出された。

S D09 (第9図) ×40 Y9~22区に位置する。溝の幅は約0.6~1.2mで、長さが約27mの規模をもつ。溝の深さは20

cm程あって全体に黒褐色土が入っている。出土遺物は土師質土器片が3点と少ない。

S D10 (第9図) ×41Y14~22区に位置する。溝の幅は1.0m程で、長さ17m以上の規模をもつ。溝の深さは20cm程あり、覆土は黒褐色土と淡褐色土の混ざりあった土で、溝の底面は一定していない。

S D11 (第11図) ×34~36Y15~23区に位置する。溝の幅は1.3~1.6m程で、一直線に伸びた一辺の長さが約18mあって、西側では「L」の字状に折れ曲がる。溝の深さは平均30cmで、底面は北東端が南東端に比べ10cm程低くなっている。溝の覆土はほぼ一様である。出土遺物は、縄文土器・弥生時代木墳の土器、中世の珠洲があり、20点程が出ている。

S D12 (第9図) ×40~41Y12区に位置する。溝の幅は0.3m程で、長さが3.0m以上ある。深さは10cm程である。

S D13 (第9図) ×34Y24~26区に位置する。溝の幅は0.5m程で、長さが5.0m以上ある。深さは10cm程であり、覆土から珠洲の壺片が出ている。

S D14 (第9図) ×34Y29~31区に位置する。溝の幅は0.9m程で、長さが6.0m以上ある。深さは10cm弱と浅い。

S D15 (第11図) ×37~44Y26~31区に位置する。溝の平面形は歪んだ台形をなし、周間に幅が0.9~1.2mの溝が巡っている。深さは南側と西側が20~30cmであり、北側が15~20cmで、東側が20~25cmと平均しているが、東側中程では、40~50cmと深い部分がある。溝の覆土は暗褐色土を中心とし、縄文土器・弥生時代木墳の土器と中世の珠洲が十数点出土した。また、溝どしが切り合うS D16とは似た覆土が入るが、S D16がS D15より新しい。

S D16 (第9・11図) ×37~48Y27区に位置する。溝は南北方向に一直線に伸びる。溝の幅は0.5~0.7m程で、長さは24m以上存在する。溝は15~25cmの深さをもち、南端がわずかに低くなっている、縄文土器数点が出土した。

S D17 (第12図) ×39~45Y35~36区に位置する。溝は南北方向に一直線に伸びる。溝の幅は0.6~0.8m程で、6.0m程の長さを有する。溝の深さは10~15cmで、縄文土器が2点出ている。

S D18 (第12図) ×34~48Y32~36区に位置する。調査区での溝の平面形は、「コ」の字状をなし更に東側に広がっている。溝は二重となり、外側には深さ20~35cmの浅い幅1.1~2.0mの溝があり、内側には50~60cmの深い幅1.5~2.0mの溝が配される。西側の一辺は約26mあって、内側の溝の長さは約21mである。また、内側の溝の南端はX37Y35区で深さが減じて浅くなる。土層セクションB・Cの観察から外側(西側)の溝が内側の溝より新しく埋まっている。覆土からの出土遺物は殆どなく、縄文土器がわずかに出ていている。

S D19 (第9・11図) ×34~52Y27~31区に位置する。溝の幅は0.3~0.5m程で、長さが37m以上ある。深さは15cm程であり、灰褐色土の覆土から近世の陶磁器や中世の珠洲などが10点余り出土した。

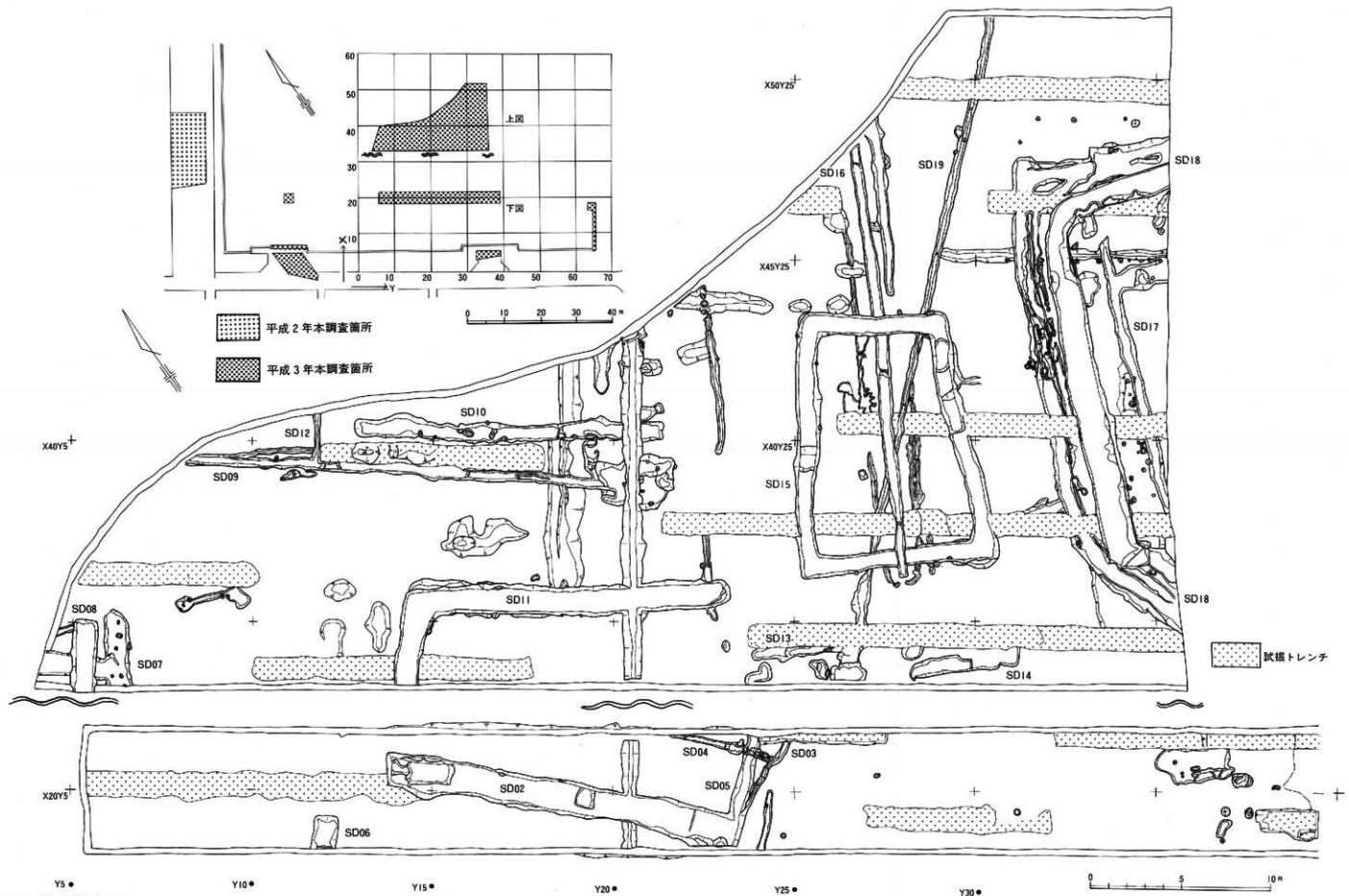
#### 用水路敷き (×6~19Y64~66区・第13・14図、図版4)

幅1.5~3.5m、延長26mの用水路敷きからは、室町から戦国時代(14世紀~16世紀)にかけての溝や柱穴・井戸など多くの遺構が確認された。狭い範囲の調査のため掘立柱建物の規模や建物の方向は不明であるが、調査区内の柱穴には10個の柱根が残っていた。なお、ここでは造構番号を31番から用いた。

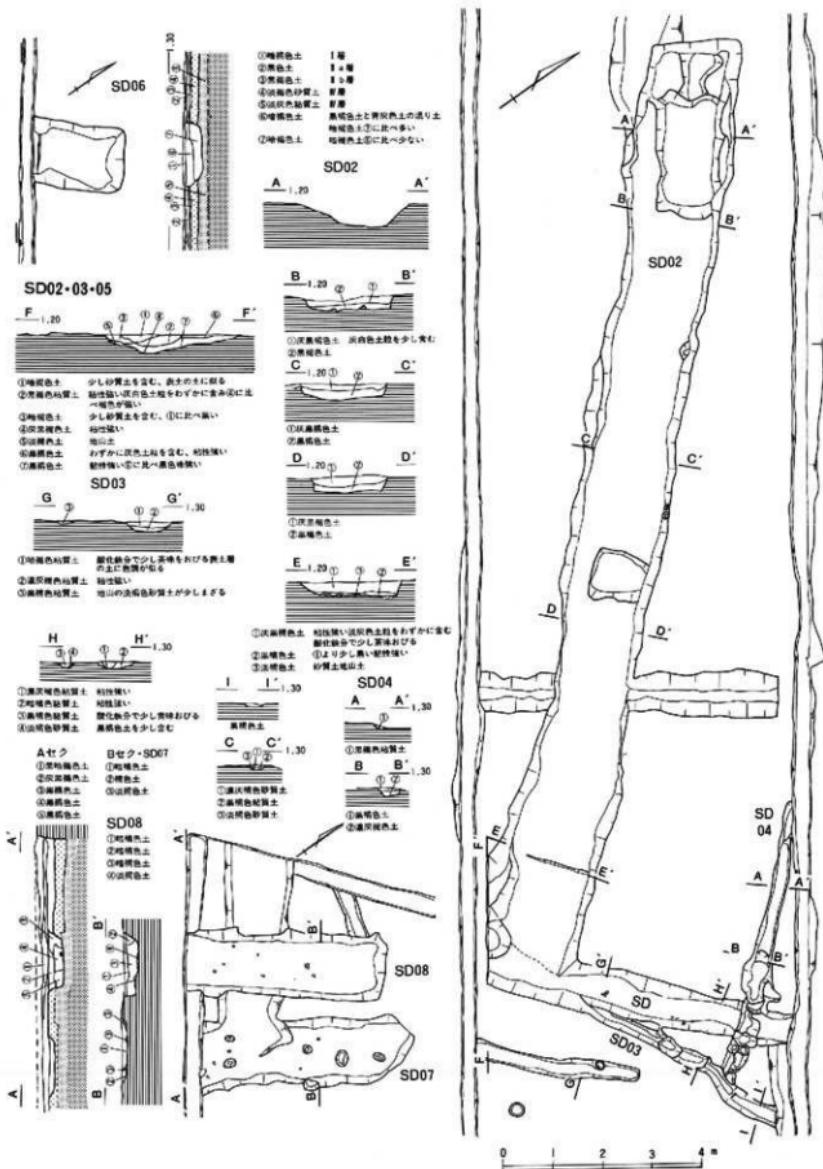
S D31 (第13図) 調査区の南端に位置する溝で、溝の上端から底面までの深さは1.1mあり、S D31と同じように黒色土面から掘込まれ、南側の掘込み面は未確認である。遺物は底面から30cmほど上の高さから下駄が出た。

S D32 (第13図) 調査区の南側に位置する溝で、造構面を15cm程掘り下げた所で確認した。溝の幅・深さ共に70cm程を測る。東側の溝上面には扁平な石2個がはまり、溝の覆土を20cm程下がった②層の黒褐色腐植土には、多くの植物の間から第15図144~150の木製品や珠洲壺片が検出された。溝の付近には断面の状況や柱根の検出から少し柱穴が存在していた。

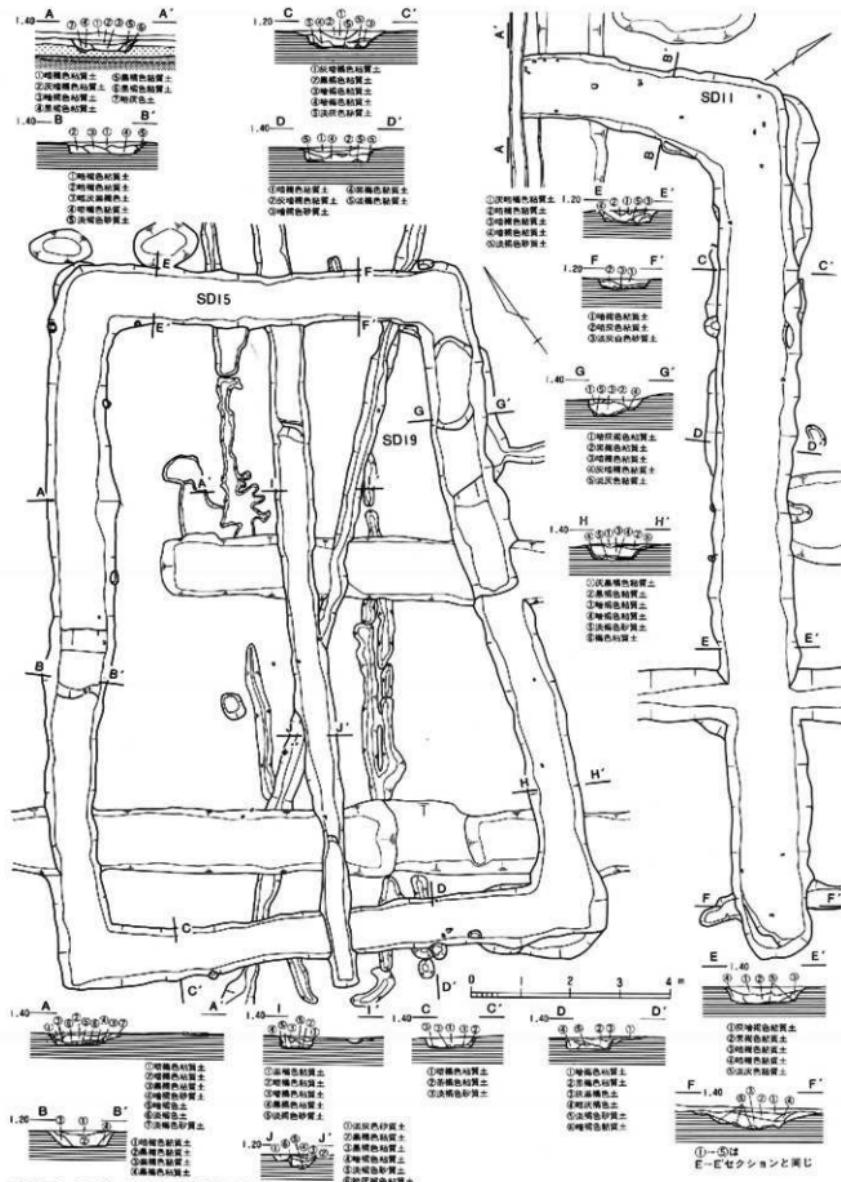
S D33 (第13・14図) 調査区の中央に位置する溝で、上幅が2.5mあり下幅が1.5mと狭くなっている。底面は二段の掘り込みとなっていて、底面までの深さは1.1mと0.7m程である。遺物の出土層は①~③層の上層に主に含まれ、



第9図 造構図 (1/200)



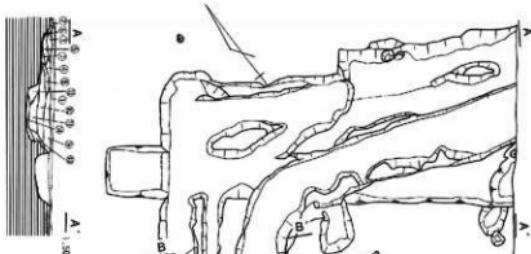
第10図 SD02~08遺構図 (1/100)



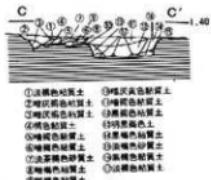
第11図 SD11-15-16-19造構図 (1/100)

SDI8セクション

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| ①唯鳴鶴貢土 | 水田耕作土                           |
| ②唯鳴鶴貢土 | わざわざに泥炭色土を含む<br>他の土とまじしまさり可い    |
| ③唯鳴鶴貢土 | より上り、より下りわらかく、無理に堅留した<br>などと云ふ。 |
| ④唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑤汎用栽培地 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑥汎用栽培地 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑦汎用栽培地 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑧唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑨唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑩唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑪唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑫唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑬唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑭唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑮唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑯唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑰唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑲唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |
| ⑳唯鳴鶴貢土 | 泥炭色土を含む                         |



- ④暗赤褐色粘質土 他の土を這いえず粘性強い
  - ⑤暗赤褐色粘質土 暗赤色を含む少し言
  - ⑥暗赤色砂質土 矿物土を含むし含む
  - ⑦暗褐色粘土層 さうした土の上より少し黒赤強い
  - ⑧暗褐色粘質土 あまりにも少い。他の土を這いえず粘性強い
  - ⑨暗褐色粘質土 暗赤色砂質土を含む
  - ⑩暗褐色粘質土 あまり、茶褐色の無機物が多めで土味おびき
  - ⑪暗褐色粘質土 暗赤色を含む少し言
  - ⑫暗褐色砂質土 言



- ①原褐色地質土 しまりけい、脚踏み跡多く茶褐色  
 ②灰褐色地質土 他のそれを食す。④に比べ特に  
 ③褐色地質土 背景地質土を少し含む  
 ④灰色地質土 沈没地質土を多く含む  
 ⑤褐色地質土 背景地質土を少し含む  
 ⑥褐色地質土 ⑦より更に茶褐色化  
 ⑦褐色地質土 他のを多く含む  
 ⑧褐色地質土 ⑨と同様に茶褐色化  
 ⑨褐色地質土 ⑩と同様に茶褐色化



- |          |                 |
|----------|-----------------|
| ①灰褐色砂質土  |                 |
| ②淡褐色砂質土  | ①の土を少し含む        |
| ③灰褐色黏質土  | ①と似る            |
| ④暗褐稍黃粘質土 | ①より少し黄色い色、無土音より |
| ⑤淡褐色砂質土  | ④の土を多く含む        |
| ⑥灰褐色砂質土  | ④に似た色、土質        |
| ⑦褐色質土質   | 少し淡褐色土を含む       |
| ⑧灰褐色黏質土  | 淡褐色土を少し含む       |



SDI7セクシ

- ①暗赤色粘土質  
②墨赤色粘土質  
③褐色粘土質

物の土をまじえず粘性強  
物の土をまじえず粘性強  
地山の泥炭色砂質土を少し含

B                      B'                      B'' 1.40

① ② ③

①暗赤色粘土質  
②墨赤色粘土質  
③褐色粘土質

物の土をまじえず粘性強  
物の土をまじえず粘性強  
地山の泥炭色砂質土を少し含



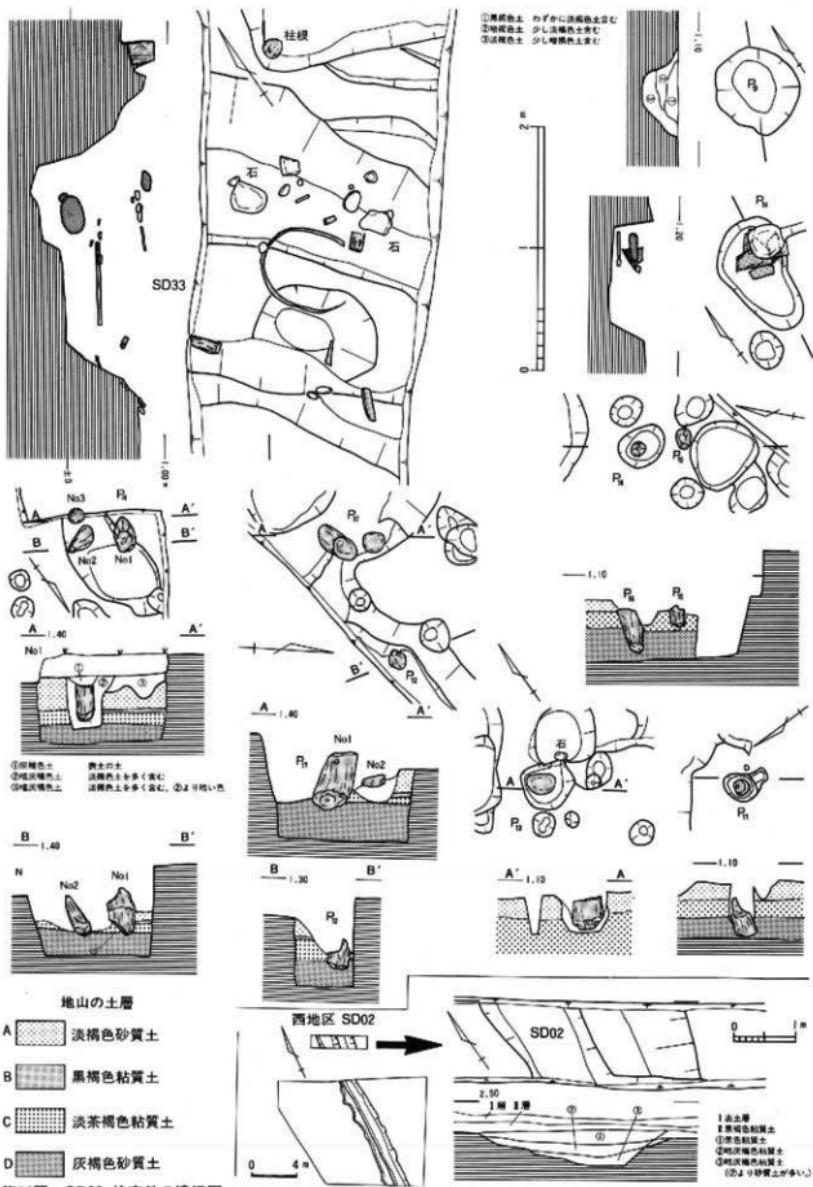
- ①暗褐色粘質土 他の土をまじえず、弱くしまる  
 ②黒褐色粘質土 ③より紀性深い  
 ③洪褐色粘質土 わざかに暗褐色土を含む  
 ④洪褐色砂質土 細粒土を少し含む



### 第12回 SD17-18造構図



第13図 SD31~37外の遺構図(%)



第14図 SD33、柱穴外の遺構図

出土遺物には、弥生時代末の土器、室町から戦国時代の土師質土器や珠洲、漆器の碗などがある。

S D34 (第13図) 調査区の北端から北東隅に位置する溝で、「し」の字状に折れ調査区外に広がっていて溝の幅はわからない。深さは30cm程あるが、他の追構の重複から底面までの深さは一定ではない。覆土から白磁や土師質土器が出ている。

S E35 (第13図) 調査区の北側に位置する素掘りの井戸で、大きさは上面の直径が1.3mあり円筒状に掘り込まれた底面の直径が1.15mある。追構面から底面までの土質は、厚さ20~30cmの砂質土と砂泥土からなり、深さが2.2mの底面では淡灰青色砂層に達し、調査時には少し湧水がみられた。遺物は土師質土器や珠洲が少し出ている。

S E36 (第13図) 調査区の中央近くに位置する素掘りの井戸で、S E35と規模や追構面から底面までの掘り込み深さが似ている。大きさは上面が短軸1.0m、長軸1.2mの楕円形をなし、円筒状に掘り込まれ底面の標高が-1.1mの淡灰青色砂層に至っている。遺物は上部半から主に検出され、ある程度埋まつた後に入っている。

遺物には數十点の削り屑と共に柵の側板、底板、箸状木製品、薄板などの木製品と青磁が出土しており、他に弥生土器が若干みられる。

柱穴状ピット (第13・14図) 杖穴の大きさには直徑または短軸が50~80cmで、深さが30~60cmのP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>~P<sub>7</sub>と、直徑が20~30cmで深さが20~80cmのP<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>などの二種類がある。いずれの柱穴にも柱根が残っている。柱穴には掘り方が殆どみられないP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と柱根の2~3倍の掘り方を掘って柱を据えたP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>などがある。また軟弱土質に建築される掘立柱建物の重さを支え沈下を防ぐ基礎は、柱根が残る11例には存在したものがない。しかし、P<sub>4</sub>の板材P<sub>11</sub>やS D31の溝上、S D32の覆土に含まれる扁平な石が、柱の礎盤やその代わりに用いたことも考えられる。

## ② 遺物 (第15~22図、図版第7~12)

追構に伴って出土した遺物は少なく、弥生時代以降の遺物は、表上下の包含層から検出された。

S D08 (第15図135・136) 135は、糸切り痕をもつ土器である。136は、弥生時代末の月影期壺に含まれる壺。

S D11 (第15図137~139) 137は弥生時代末頃の壺の摘み部分である。138・139は珠洲のいわゆる撫鉢で13世紀前半の珠洲Ⅱ期頃の片口鉢である。139は、内面に密な間隔におろし目を入れる。

S D13 (第15図140) 140は、珠洲の壺下半部にあたる破片である。

S D15 (第15図141・142) 141は、弥生時代末の壺の底部で、142は珠洲の壺の体部片である。

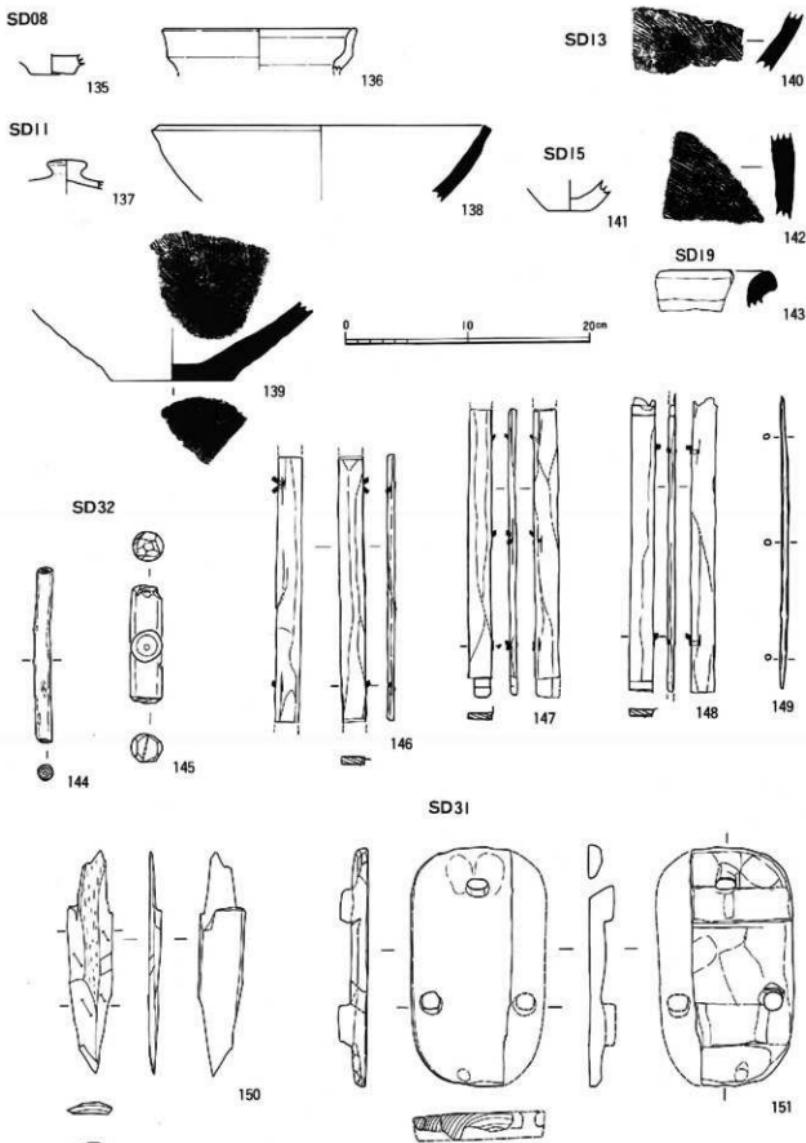
S D19 (第15図143) 143は、珠洲V~VI期の壺口縁部で、口縁端部を丸くおさめ、頸部は短く外反する。

S D32 (第15図144~150) 144・145は、小枝の両端を切断し、145は細かく面取りしている。146~148は同一部材が折れ日で切れたもので、幅2.0cm、長さ22.0cmの両端に2箇所の折り目を内側に入れ、四角く配し底板を皮紐で締合せたものであり、折敷の側板である。149は長さ24.0cmの箸状木製品で両側が細く削っている。150は削りかけの板で、先端が細く尖る。

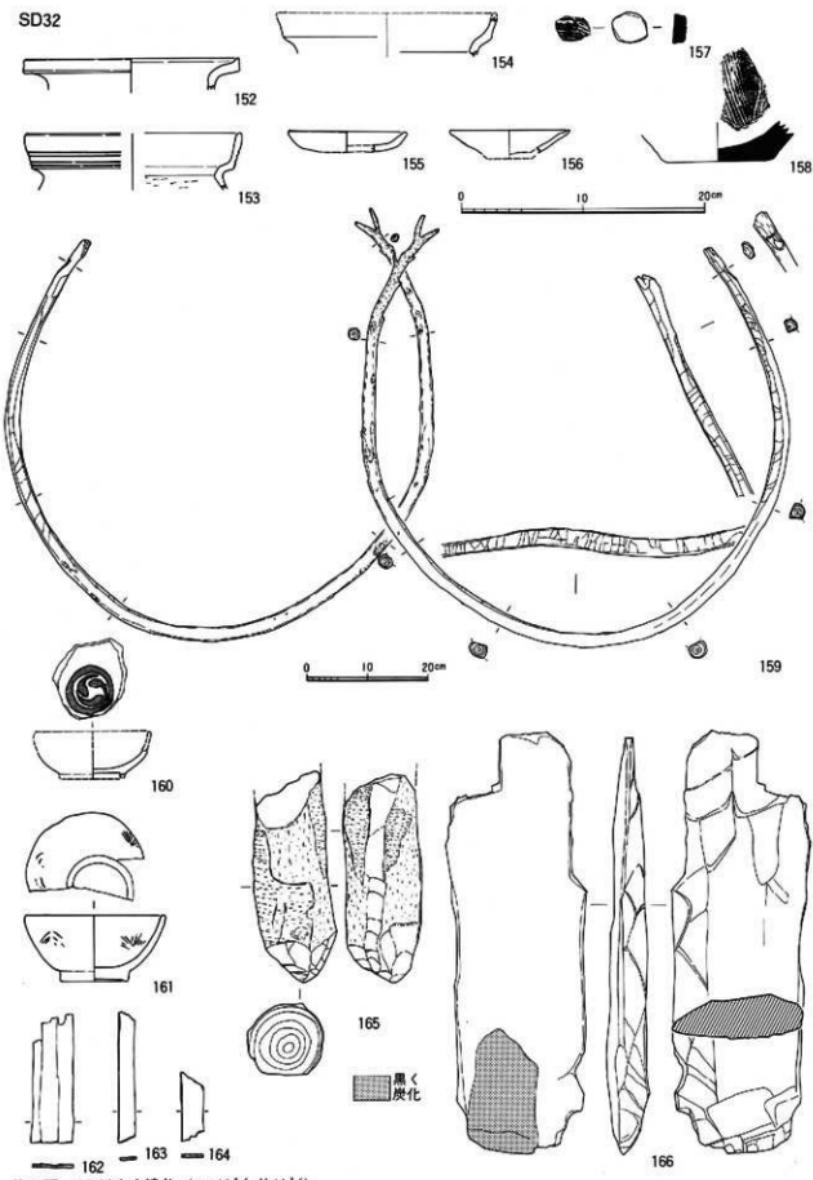
S D31 (第15図151) 151は、台と齒が一本でつくりだされたいわゆる連齒下駄である。長さは19.5cm、幅は欠けているが推定11.0cmあり、高さは2.0cmに対し、台の高さが1.4cmを有する平下駄にあたる。平面形が椭丸方形に仕上られ、材質は軟質の柾目を用い後側に筋がある。

S D33 (第17図152~166) 152~154は、弥生時代末頃の土器である。152は壺の口縁部で、153、154は有段口縁の壺口縁部である。体部内面をヘラケズリ調整する。157は珠洲の壺片で、まわりが欠けて円形をなしている。158は珠洲の片口鉢で内面におろし目が入る。155・156は土師質土器で、155は非ロクロ成形の皿で13~15世紀前半に入る。156は器厚が薄くしたもので15世紀後半にあたる。

159~166は木製品である。159は、枝を直径70cm程に丸く左右が均等になるまで曲げ加工の処理を行なっている。

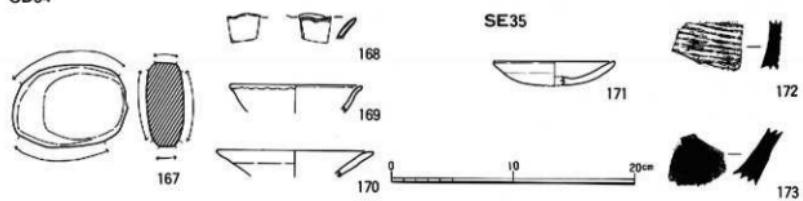


第15図 SD08～19、31・32出土遺物 (3/4)

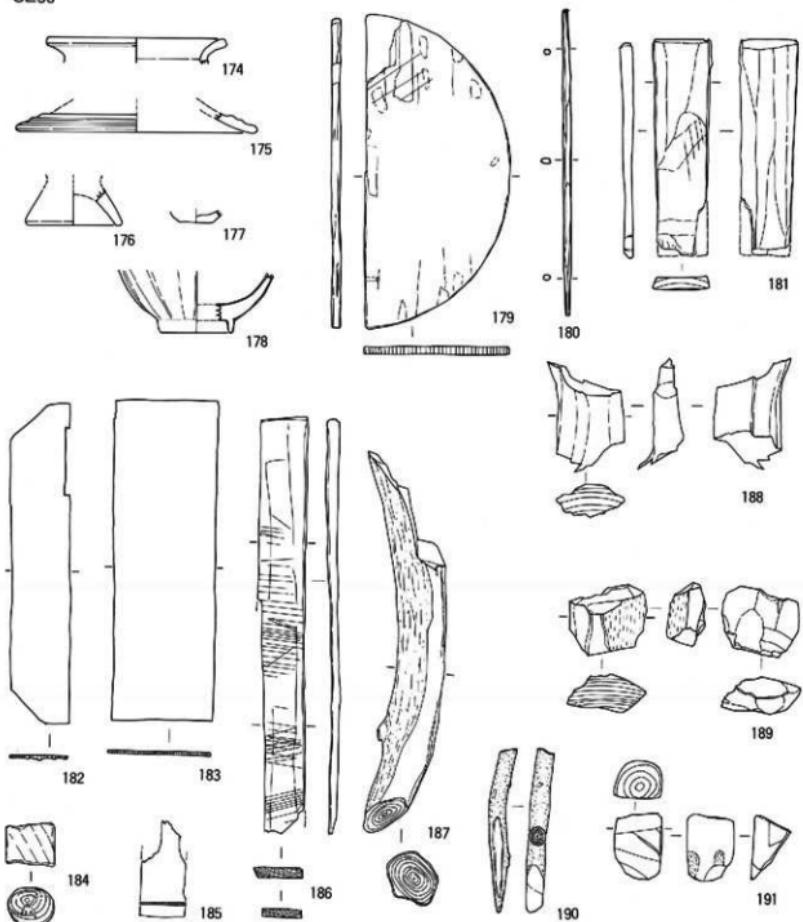


第16図 SD32出土遺物 (159は1/2、他は1/4)

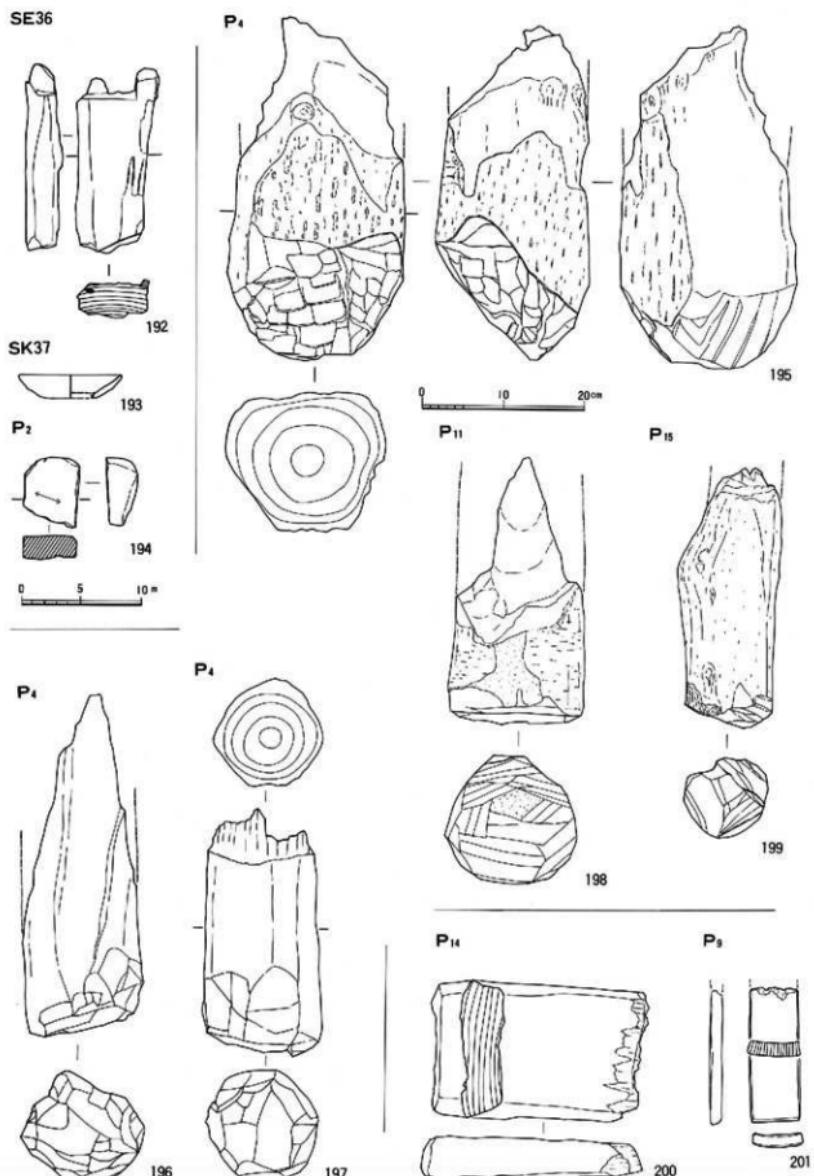
## SD34



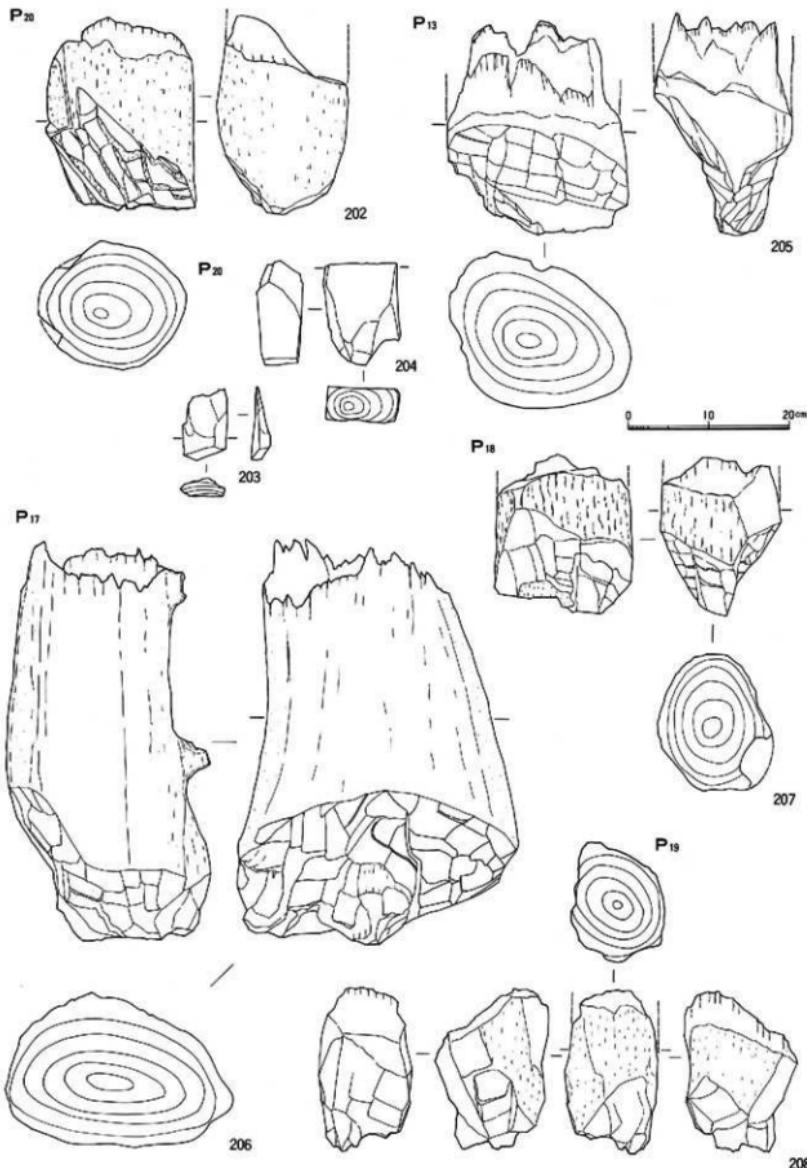
## SE36



第17図 SD34・SE36出土遺物 (1/2)

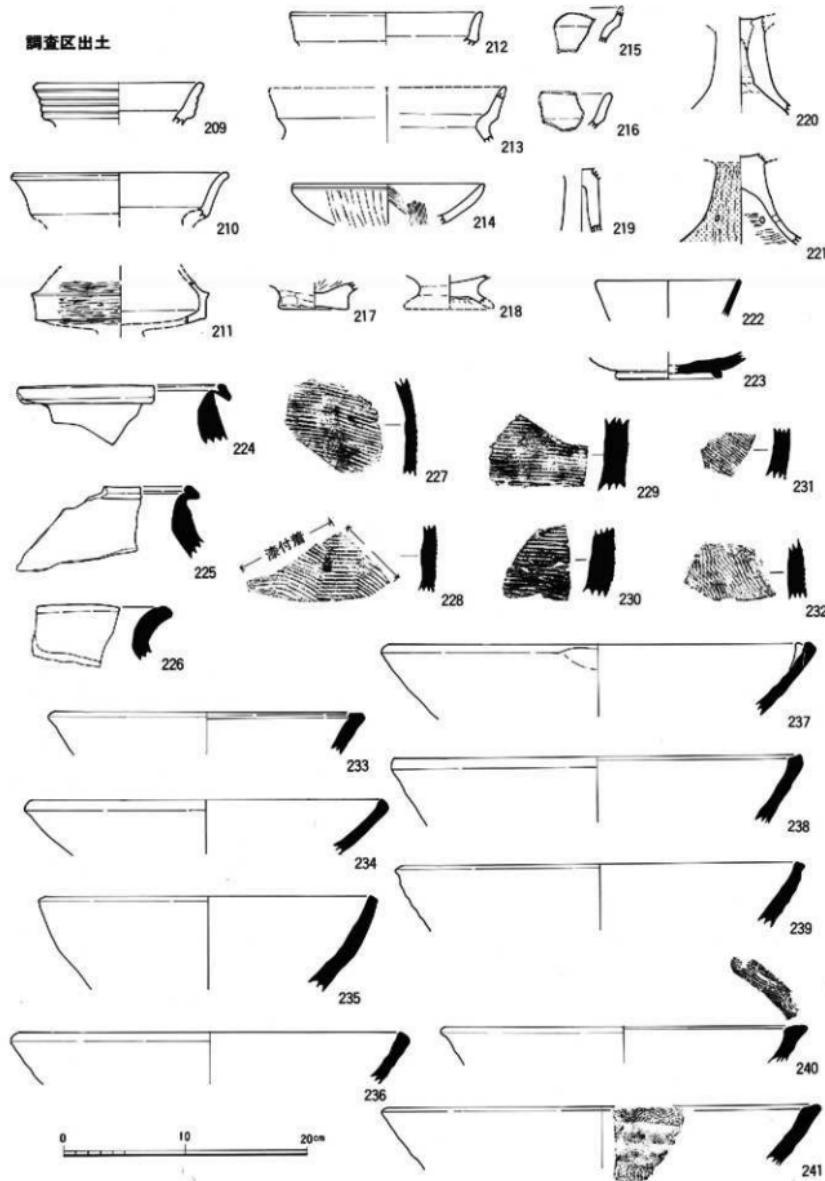


第18図 SE36・SK37、柱穴出土遺物 (192～194・200・201はノリ他はセ)



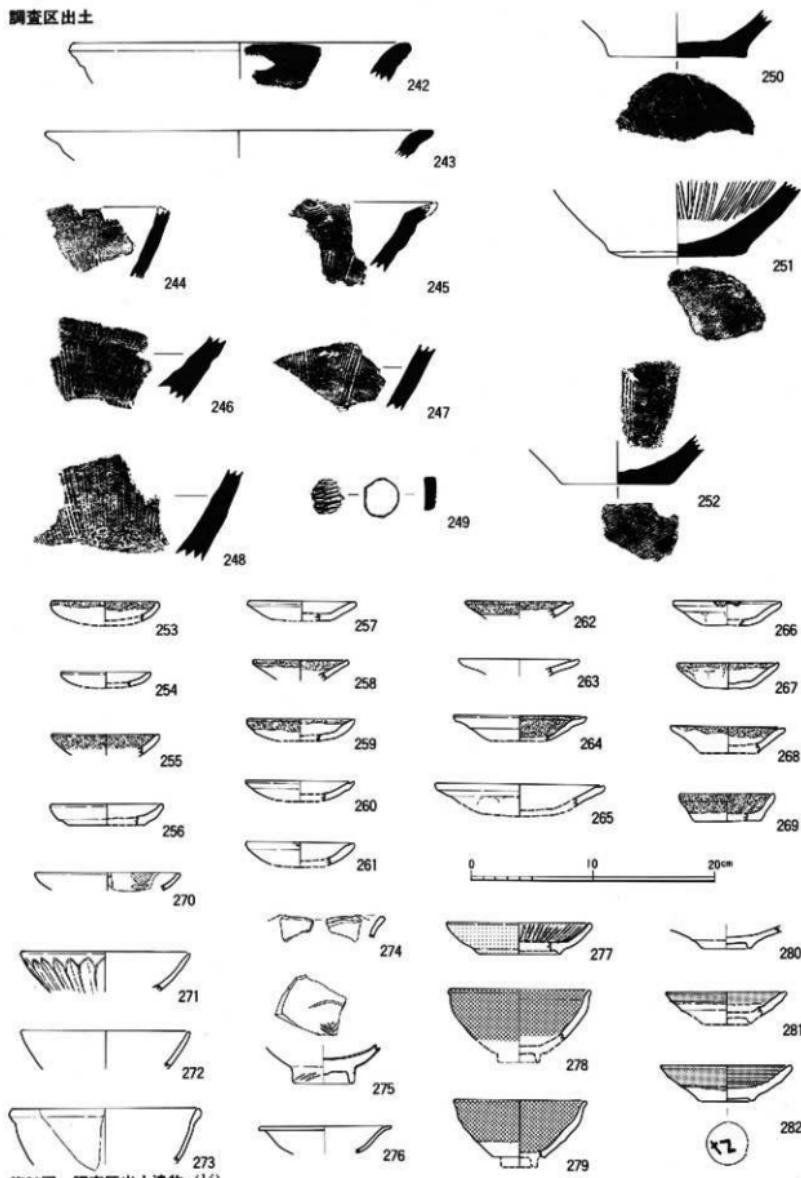
第19図 柱穴出土遺物 (1/6)

調査区出土



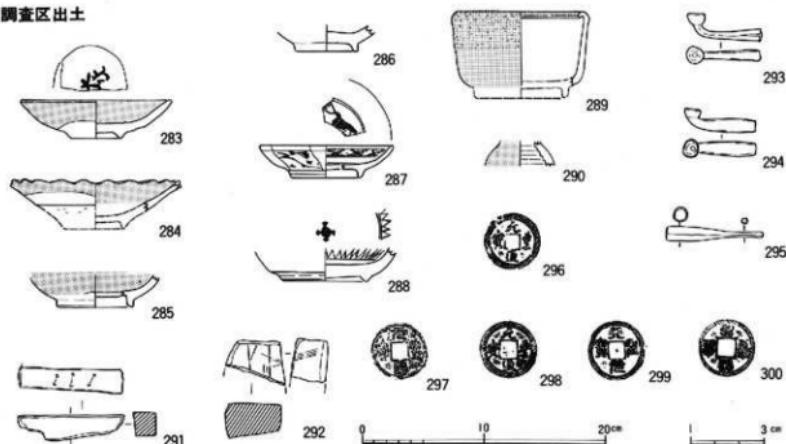
第20図 調査区出土遺物 (1/4)

調査区出土



第21図 調査区出土遺物 (3/4)

調査区出土



第22図 調査区出土遺物 (297~300は3%, 他は1%)

平面形から箕の柄とみられるが、枝の先端側が枝分かれして未製品と思われる。枝の幹側は、幅1.6cm、厚さ3.0cmの太さに削り外側には抉りが入る。箕の内側のある部分は、2/3まで丹念に削り込まれ、枝の先端側の細くなるに従い、削りの仕上げる面が少なくなっている。

160・161は漆器の碗である。160は薄い木地の内外面に黒地の漆をかけ、内底面に赤色の漆で三巴文の模様を描かれる。161は底部が厚めの高台をなし、内外面に黒地の漆をかけ、外面に赤色の漆で模様が描かれる。法量は口径が1.5cm、器高が5.3cmで器体の深い碗である。162~164は厚さ3mm程の薄板であり、165は直径6.0cm程の枕状の木製品で、先端を多方面から削り尖らす。166は幅10.5cm、長さ34cm程の板材の一面を細かく削り込んでいる。用途は不明であるが、一端に黒く焦げた箇所がみられる。

S D34 (第17図167~170) 167は、縄文時代の擦り石で、扁平な石の二面とまわりの対面二面が擦られ摩滅している。168は青磁の稲花皿で口縁に沿って2条の波線文がめぐる。169は白磁の端反りの皿である。170は土師質土器で口縁部をヨコナデ調整する。

S E35 (第17図171~173) 171は胎上がきめ細かく灰白色をした土師質土器で、口縁部をヨコナデし、他の土師質土器とは胎上がり異なる。172・173は珠紋の甕と鉢である。

S E36 (第17図174~191・第19図192) 174~177は弥生時代末頃の土器で、174は、口縁部が「く」の字状に外反する甕である。175は高杯の脚部で、176は台付き鉢の台の部分にある。178は13~15世纪の青磁の碗高台である。

179~191は木製品であり、179は直径26.0cm程で厚さ0.6cmの円板の一部である。半月形の一側面には、二つの板を接合した木釘が残っている。板の表面には所々に淡茶色をした漆が付着している。180は長さ25.3cmの箸状木製品で細く面取りされる。181は高さ17.8cmの桶の側板で、板の上端の幅が4.8cmと広く下端が狭くなり、横断面は丸みをもたせていて、内面の下方は摩滅し黒ずんでいる。182・183・185は厚さ3mm程の薄板である。182・183は長さ21.3cmあり、隅が切りとられる。186は板の一面は俎として用いられ刃物跡がついている。184は木炭であり、187・190は枝の一端に切断面をもつもの。188・189は板の削り屑で他に多数ある。191は木の心材を用い、側面が三角形をなした楔

状のものである。

S K37 (第18図193) 193は口径が8.2cm、器高が1.9cmのロクロ成形の土師質土器であり、糸切り底となる。時期は15世紀後半である。

#### 柱穴及び柱穴状ピット (第18図194~201・第19図202~208、図版第10~12)

194は、きめ細かい粘板岩を石材とした砥石である。200はP<sub>u</sub>から検出された厚さ3.5cm、幅11.0cm、長さ17.5cmの板で出土位置から櫛盤として利用された可能性がある。201はP<sub>u</sub>から検出された桶の側板で櫛目材を用いる。203・234はP<sub>u</sub>のそばの柱根の202から出土したものである。204は四角形の断面をもった角材で、203は楔形に加工している。

柱根は11本出土した。196~199は直徑が11.0~16.5cmの太さの柱根で地面上に触れる面は、直角に近く切断され細かく調整される。また、195は直徑約20cmの柱根の先端が「V」字状になるように両側から削られる。柱根に残るちょうどの刃先幅は最大4.0cmである。同様に202、205、207の柱根の先端も「V」字状になるように両側から削り込まれ、柱の直徑は17~23cm程の太さの木を用いている。206は断面が梢円形となった木材を利用した柱根で先端は細かく削られる。これらのちうな跡が木の伐採後に、柱を地面に据えるためどの程度さらに再加工されたかわからないが、細い柱は先端を直角にし、少し太い柱は、先端が「V」字状の断面形となっている。

#### 調査区出土の遺物 (第20~22図 209~300、図版7~8)

遺物は、調査区の表土排土や遺物包含層のII層黒褐色土及び、調査のための排水用の溝掘りの際に出土したものである。209~221は弥生時代末の月影期に対応する土器で、209・210・212・215・216は有段口縁の壺口縁部にあたる。209には櫛状具による擬凹線文が引かれる。211は台付き長頭壺の体部片の外面をヘラミガキする。219~221は高杯の脚部にあたり、221は外面を赤彩する。217は壺の底部にヘラミガキする。

奈良から平安時代にかけての須恵器222・223は杯身の口縁部と底部であり、233は直口の壺口縁部にあたる。

224・225は瓷器系陶器に含まれる壺の口縁部で端部が「N」字状に屈曲し、13世紀末~14世紀頃のものであり、珠洲IV期に伴う八尾窯の製品である。珠洲226~252には、227~232の壺、234~248、250~252の片口鉢、226の瓶の口縁部が出ており、227~232は壺の体部片で、228は練杉状のタキ目が施し、団の矢印のところには淡茶褐色の漆が付着していて漆が補修に用いられている。

片口鉢は各時期のものが含まれる。235~237は12世紀前半の珠洲II期頃のもの、238~239は13世紀前半珠洲IV期のもの、240・241は15世紀の珠洲V・VI期のもので、水平もしくは内傾する端部に櫛目波状文を加える。また242~245は口縁端部が外反し先細りし内面に櫛目波状文を有する。時期は珠洲VI期の15世紀後半から16世紀にかけてにあたる。片口鉢のおろし口には間隔をおいて引く247~252と、間隔をおかずして十数あまりの櫛状具で引かれる。246~248・251があり、一般に間隔をおかない後者は、珠洲V・VI期によくみられる。250~252の底部の切り離しは、静止糸切りによっており珠洲II期以降に共通する手法が用いられる。

253~256、257~269は土師質土器で、口縁部の内外面には、油脂状や蠟状の付着物が半数近くに認められる。この土器にはロクロ成形による(A類)256~269があり、底部を欠くが268も含まれよう。他は非ロクロ成形によるもの手づくりや型押しによる成形である(B類)。253~255は、口縁部が内反する口径8.4~9.0cmの大きさのもので、口縁部内外面にヨコナデを行なう(B-1類)。257~259は、口縁部が直線的に底部から立ち上がり外傾する口径8~9.0、器高1.7cmのもので、口縁部内外面にヨコナデを行なう(B-2類)。260~267は口縁部が外反し端部をつまみ上げるもので(B-3類)、口径が8.5~9.0cm、器高2.0cm程の小皿とL1径が11.0~14.0cm、器高2.0cm程の大皿がある。

これらの土師質土器は珠洲やその他の共伴が明らかでないが、B-3類は上市町円庄城の調査成果によると16世紀中頃の遺構S-D1002(高慶他1985)に口縁部形態の似たものがある。またB-2類は14~15世紀頃であろう。

271~275青磁で、271は色調の青味灰色の釉をかけた高蓮弁文を片彫りにした龍泉窯系の碗。272は朽葉色をした無

文の碗、273は淡緑色で断面に漆が付着する無文の龍泉窯系の碗である。274は棱花皿で、275は見込みに一条の圍を入れ草花状の印文をつける。267は端反りの白磁皿である。

277は美濃・瀬戸の内面に丸彫りが施した灰釉を総掛けした菊皿で、278・279は美濃・瀬戸の天目茶碗で、285は灰釉総掛けした碗であり16世紀代に含まれる。

越中瀬戸には、278の天目茶碗と、282の内面に陸帯重圓が施され外底面に墨書きが記される。280・281は小皿であり284は鉄釉のひだ皿である。また283は灰黄色をした灰釉の丸皿で、見込みに書体不明の「人口」の印文が施されたもので生産地が不明である。285は底部が露胎の深緑色の釉をかけたもので近世に下る時期である。

287・288は伊万里染付の皿であり、288の見込みに五弁花のコンニャク判をおす。289は立ちの低い筒形の香炉で外面上半には淡灰色の釉が吹き出し、口縁は内側にかえりがつき、287と同じく近世にはいる。

金属器には、293・294・295のキセル雁口と吸い口があり、古銭には元豊通寶3枚と他の通寶1枚がある。291・292はきめの細かい石材を用いた砥石である。

#### 4 西地区の調査（第14図下、図版3下）

調査は、南側の搬入口に接した用水敷きで溝を確認した。溝の上幅は2.7mで 下幅が0.7mあり、遺構の掘り込み面からの深さが70cm程である。遺物は、覆土の②・③層から弥生時代末頃の土器10種と加工痕のない枝が出上した。

## IV ま と め

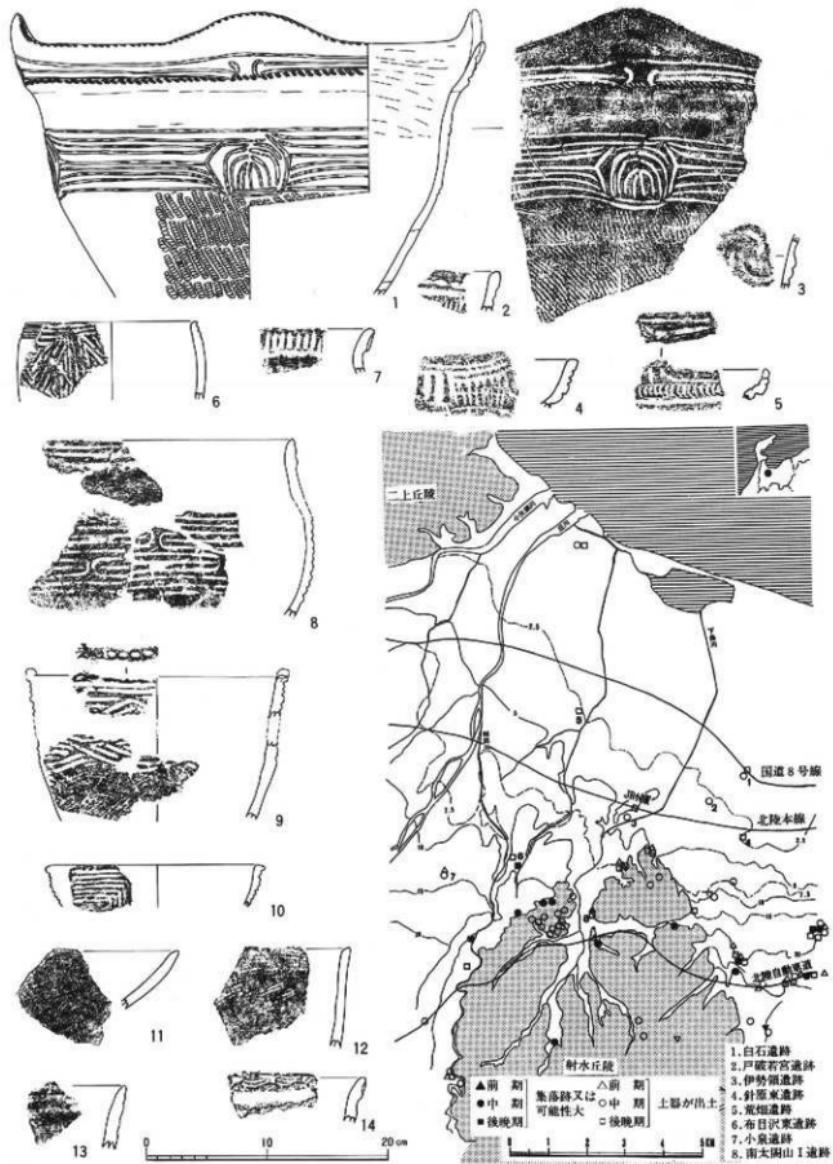
白石遺跡は、西地区と東地区とからなり、西地区的南端の一部を調査して弥生時代末頃の溝一条が検出された。また東地区からは、繩文・弥生時代・奈良～平安時代の遺物、鎌倉～室町・戦国・江戸時代に至までの遺構・遺物がみつかり、断続的ながら人々の生活の痕跡が残されていた。

#### 1 繩文時代

遺物は中期後葉の古串田新式から後期初めの気屋式までの土器が出ている。土器の出土量は少ないが、大形破片で煤が付着すること、砂泥層から円礫や炭化物が上器と共に周辺から出土することから、洪水などにより上流から流されてきたものとは思われず、当時の人々が平野部で活動した結果遺物が遺跡に存在したものとみなされる。

当遺跡の南方約3km隔てた射水平丘陵では、住居跡が検出されるか、またはその可能性をもつ中核的な遺跡と土器だけが出土するか、またはわずかな遺構を伴う小遺跡の分布が知られている。遺跡の多くは平野部に接する下条川沿いの平野部に立地していて、遺跡数は中期にピークに達し、後・晚期には減少している（山本1992）。当時の富山湾と周辺の海水準の変動は、繩文時代中期から前期の今から4000～6000年前に現海面より4～5m高かったのが、後期の3,000前から古墳時代の1500年にかけては現海水面より2m程低くなりそれ以降現在に回復したとされる（藤井1967・1986）。射水平野には、いわゆる繩文海漫の前期にあたる富山市小竹貝塚や規ヶ森貝塚が著名な遺跡として存在する。海退する中期以降の遺跡は数少なく、射水平野の変遷と密接な関係がある。庄川下流の三日曾根遺跡では、繩文中期後葉の串田新式から後期初めの気屋式までの土器が出土しており（間坂1966）、富山市利波遺跡では繩文中期頃の上器1点がある（岡崎1966）。また伊勢領遺跡から中期の磨製石斧・石錐・石棒の報告があり（木倉1969）、新湊市荒畠遺跡からは後期の気屋式と晚期後葉の下野式土器が低湿地から出土したことが報じられている（県教委1986）。

第23図は射水平野の4遺跡から出土した繩文土器である。1は、昭和47年に国道バイパスの工事をした際（現在の8号線）に、大江・鷲塚の境の地下90cmから出土したと注記されている。正確な出土地点はわからないが当遺跡とは平近距離に位置する。上器は波状口縁の深鉢で、口縁部に2条の沈線を孤線で区切り、脇部に孤線を中心に両翼が二叉状に沈線が彫られた、後期後葉の八戸市新保Ⅱ式頃にあたる。2～12は平成3年度に小杉町の実施した調査により出土した土器である。2は戸破若宮遺跡からの中期後半の列点をつけた土器であり、3は、伊勢領遺跡からの中期中葉の



第23図 射水平野の縄文土器と遺跡分布図

〔大境13号 1990年刊行を参考に作成〕

土器で、4・5は試掘による数十点の資料の一部である。4・5中期前葉の深鉢の口縁部にあたる。6～14は、針原東遺跡から出土した、晩期末の大洞A式に属する土器で6・7・10には赤彩される。6～11は精製土器である。6は平行沈線下を縁に区切り間を斜めの沈線で埋める。7は降带上に継続の沈線を引く。8は上下二条の沈線の間を二段の柳葉形にした文様をいれる。9は口縁部に突起を付け、稜衫状の模様の下に条痕文があり、外側に煤が厚く付く。9は浅鉢で12～14は粗製土器の深鉢である。13は浅い三条の凹線を引き、14は口縁部に条痕文が押し引いて巡る。

射水平野の中期以降の遺跡は、現在上記のように土器や石器が若干出土する程度で、沖積地は常に河川の氾濫の危険を伴い、生活するにはかなり困難な地域であったと思われ、居住を示す炉跡は確認されていない。居住域の丘陵と海岸線を結ぶ標高1m程の沖積平野の中に存在する本遺跡が生業活動とどのような関連を有した結果なのかは、出土遺物からはつきりしない。

## 2 弥生～平安時代

弥生～平安時代の遺物は西・東地区の広い範囲から出土した。遺構は西地区から町道建設に先立つ調査によって、古墳時代初め（古府クルピ期）の溝を検出し、中から土器のほか桶・板の加工材・瓦類がみつかり遺構周辺に集落の存在が推定された。試掘調査では、土器が比較的限られた箇所にまとまっている場合もあり、何んらか遺構の存在が伺える。当遺跡の西南約1kmには弥生時代末の戸破若宮遺跡が立地しており、下条川沿いの低地の開発がこの頃に始まり人々の定着が見られる。しかし、古墳時代初頭以降は周辺の遺跡を含め、実態がまだ充分把握されていない。

## 3 中世

東地区の東端では、集落の跡を示す遺構が重複していた。遺物には珠洲II期の12世紀前半、珠洲IV期の13世紀前半珠洲V・VI期の15世紀や16世紀の珠洲や土師質土器、青磁、白磁などが多時期にわっている。西側では、幅1～2m、深さ数十cmの溝で構成される直線や「L」・「C」の字形、四角く巡るものがあるが、殆ど遺物を共伴せず最も新しい遺物が珠洲であったことから中世の遺構の可能性が高い。小杉町上野遺跡第II台地から方形に巡る中近世の溝が確認されており出土遺物から墓域等の遺構とされている（橋本 1974）。当遺跡の遺構の性格は不明であり、東側調査をまって今後行なっていきたい。

## 参考・引用文献

- オ 脇崎卯一 1966 「射水平野の遺跡 2利波地区」『放生津潟周辺の地学的研究』第三集 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所
- キ 木曾豊信 1969 「Ⅱ郷土文化の黎明・亘在園の発達と村の起り」 小杉町史
- ク 久々忠義 1986 「富山県における「月影式」土器について」『シンボジウム「月影式」について』石川考古学研究会
- コ 高慶 孝・宮田進一・久々忠義 1985 「富山市上市町・庄城跡第5次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 小島俊彦 1972 「鶴文中期」「富山県史」－考古編－富山県
- 小島俊彦 1974 「北陸の鶴文中期時代中期の編年－戦後の研究歴と現状」 富山考古学会会誌 大塙5号
- タ 高瀬勝喜他 1983 「野々市市街経緯遺跡」 野々市町教育委員会
- ト 富山県教育委員会 1986 「昭和60年度富山県埋蔵文化財調査一覧」
- ハ 橋本 正 1974 「小杉町上野遺跡－記録写真編」 富山県教育委員会
- フ 藤井昭二 1964 「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟周辺の地学的研究』 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所
- 藤井昭二 1986 「埋没林と海水準変動」季刊考古学 第15号 雄山閣出版
- マ 間坂儀三郎 1966 「射水平野の遺跡 3牧野地区」『放生津潟周辺の地学的研究』 第三集 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所
- ヤ 郡井 駿・池野正男 1976 「富山県立山町岩峠野遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 山本正敏 1991 「3・射水丘陵の鶴文中期時代遺跡」 富山考古学会 大塙13号
- ヨ 占岡康暢 1981 「山世陶器の生産と流通(2)」『考古学研究』第28卷第2号 考古学研究会
- 吉岡康暢 1989 「珠洲の名陶」 珠洲資料館
- 米沢義光 1989 「気泡式土器様式」『縄文土器大観4』 小学館

図版第1

1. 調査前の状況

西から



2・3. 西地区  
町道の調査  
南から

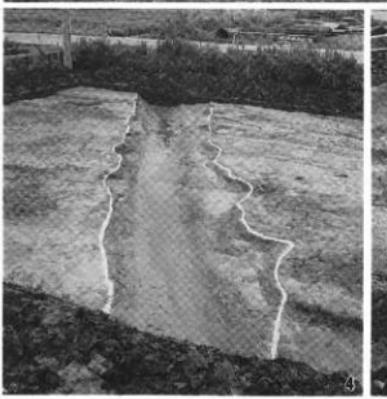


2

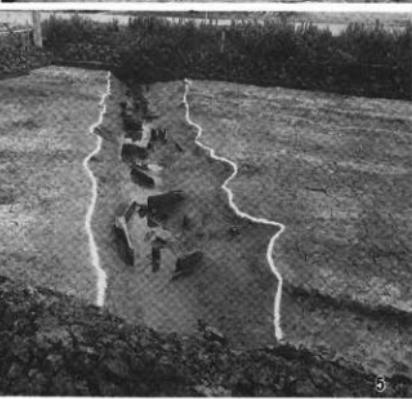


3

4・5. 西地区  
SD02、搬入  
口の調査  
北から



4



5

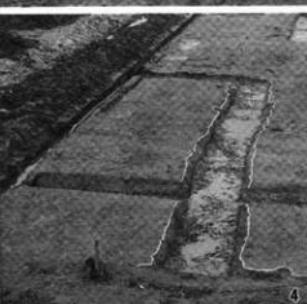
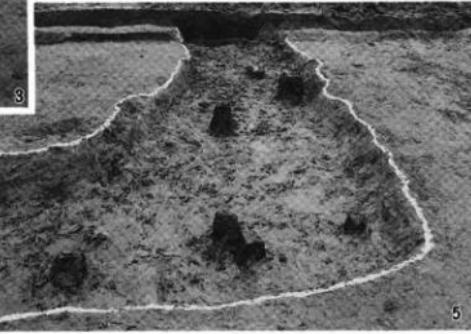
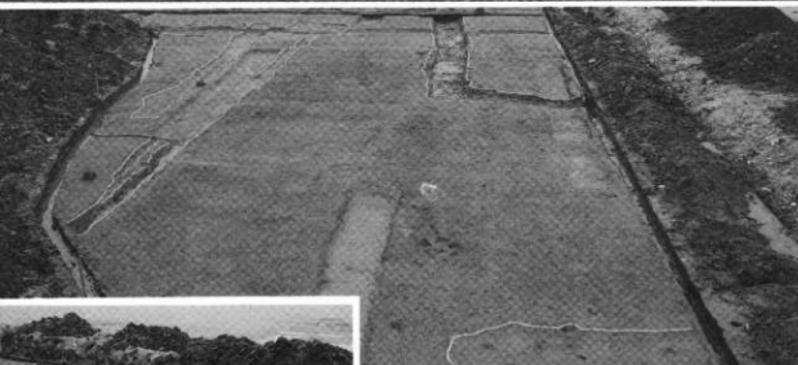
6・7. 東地区  
SD01、搬入  
口の調査  
西から



6



7



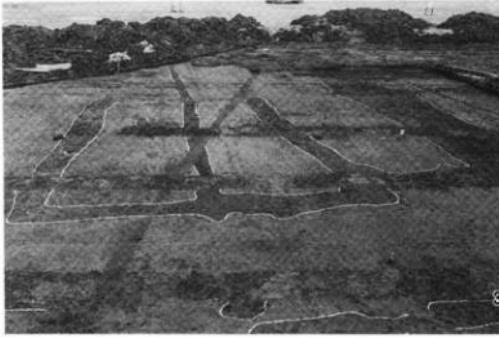
1. 左: SD18  
右: SD15・16  
北から



2. SD18  
南から



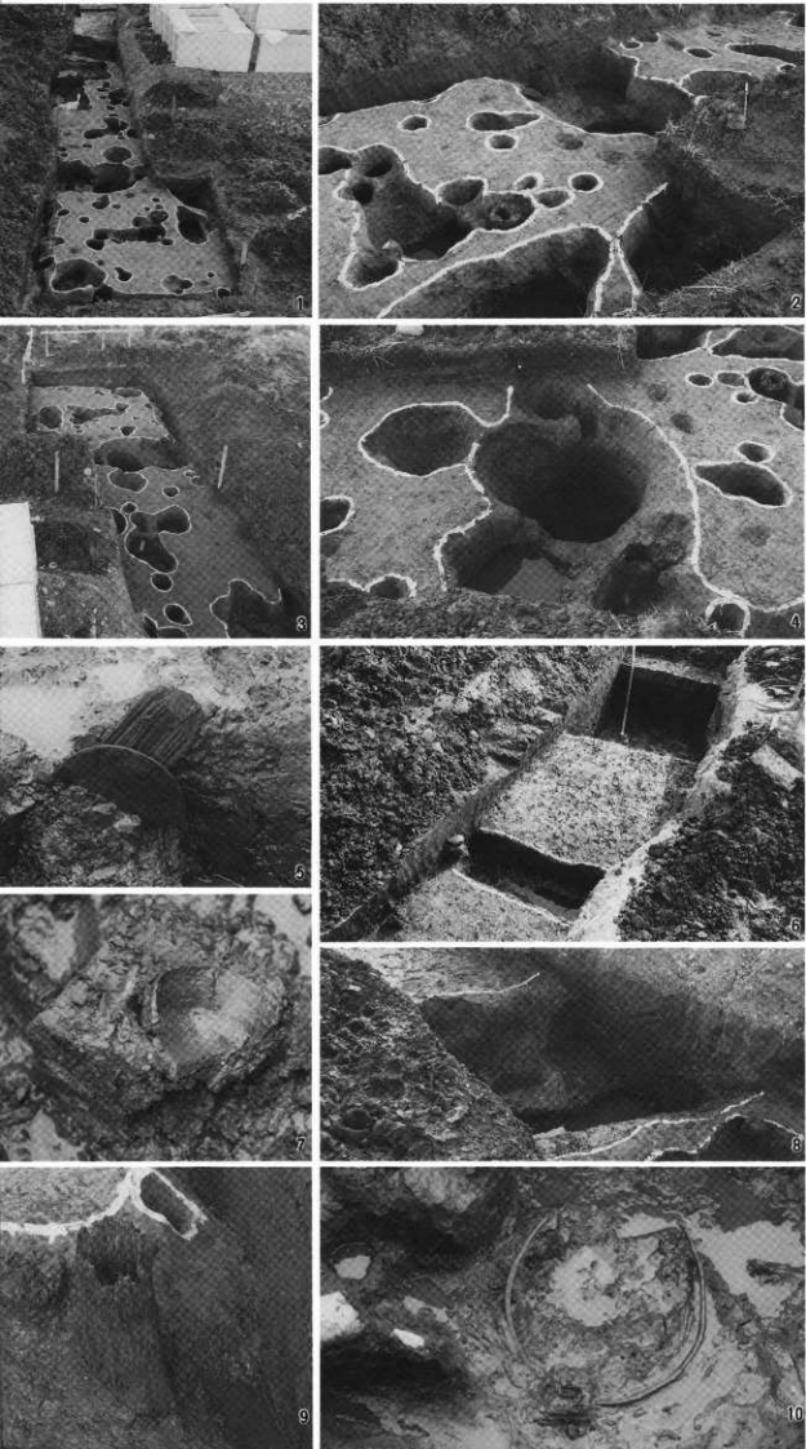
3. SD15・16  
検出状況  
南から



4. 西地区の用水  
敷き、SD02



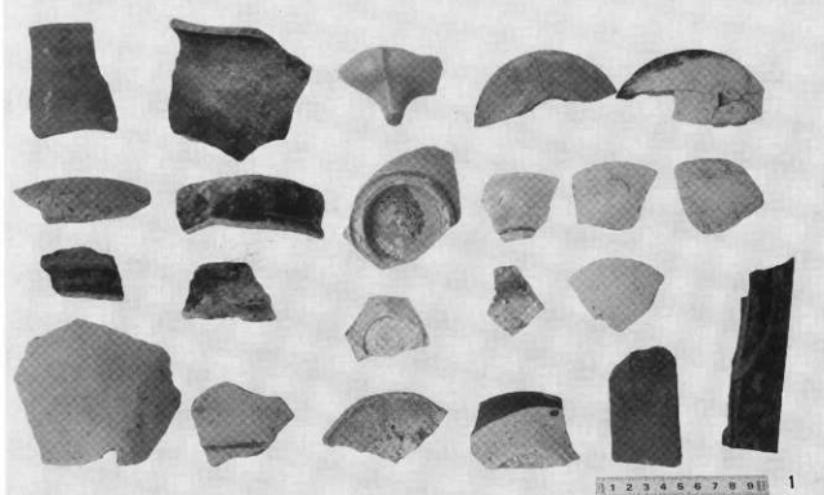
図版第4



図版第5

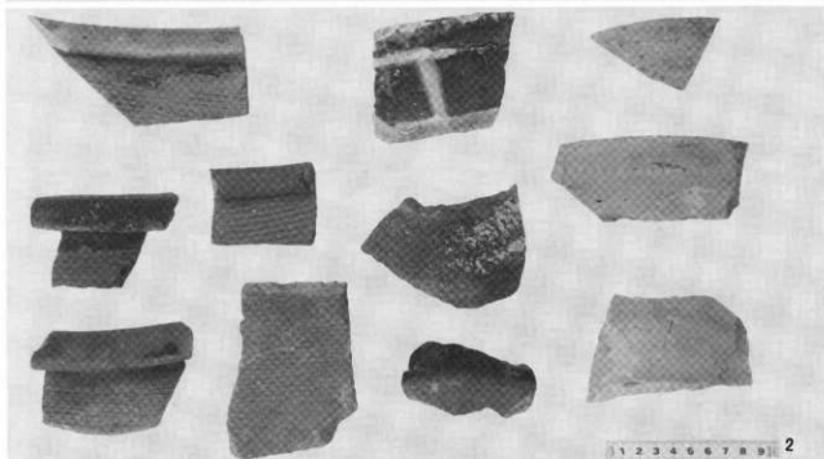
出土遺物

1. 試掘調査の  
出土遺物



1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 1

2. 同 上



1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

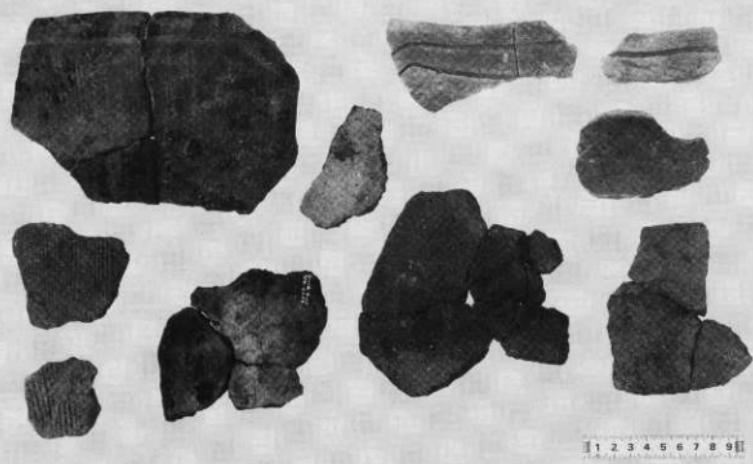
3. 東地区  
Ⅲ・Ⅳ層出土  
の縄文土器



1 2 3 4 5 6 7 8 9 3

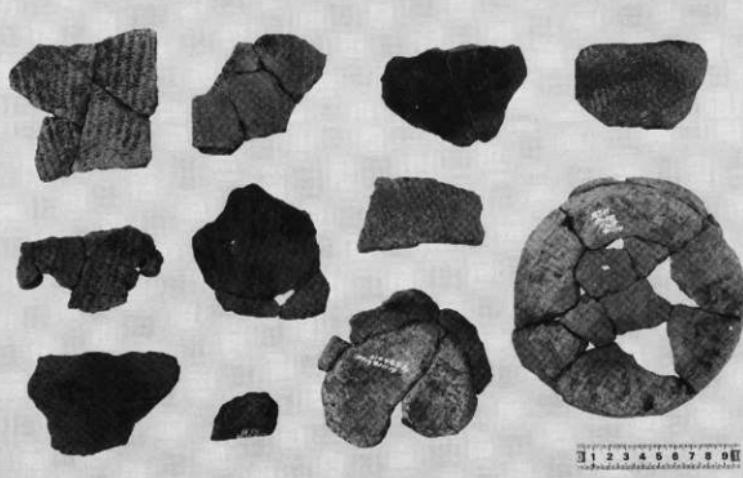
図版第6

東地区の  
出土遺物



1 2 3 4 5 6 7 8 9

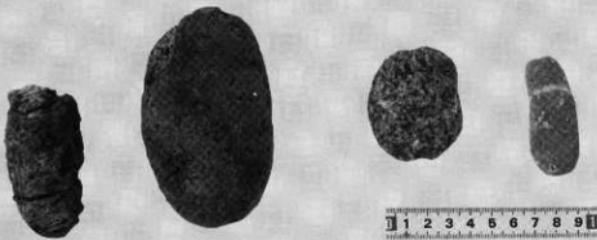
1



1 2 3 4 5 6 7 8 9

2

1-2. III・IV層出土  
土の縄文土  
器



1 2 3 4 5 6 7 8 9

3

3. III・IV層出土  
の石器

図版第7

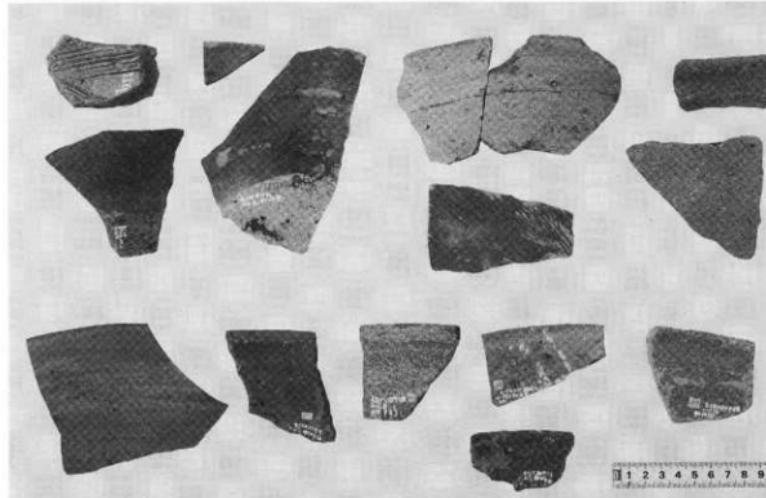
東地区  
出土遺物

1. 弥生土器及び  
須恵器



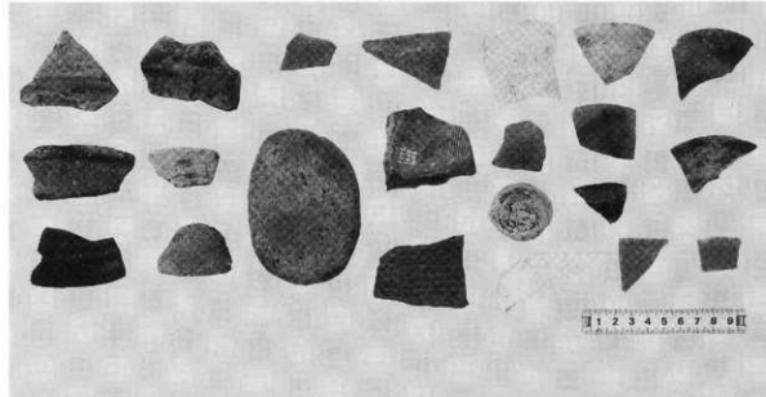
1

2. 珠洲



2

3. 用水敷き出土  
遺物



3

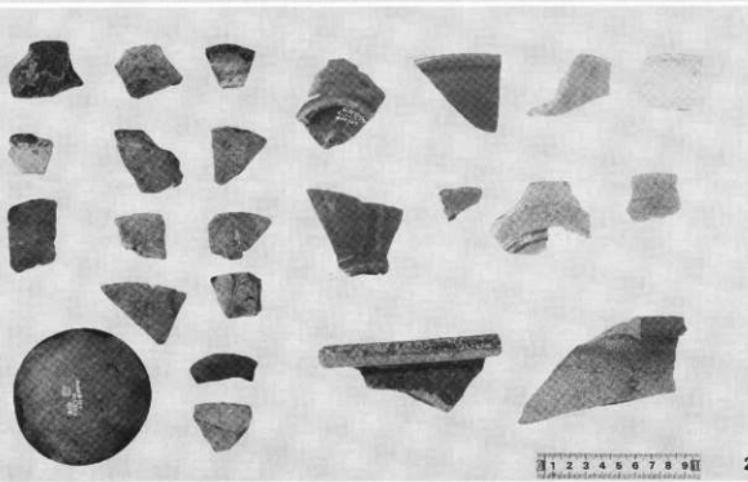
図版第8

東地区  
出土遺物



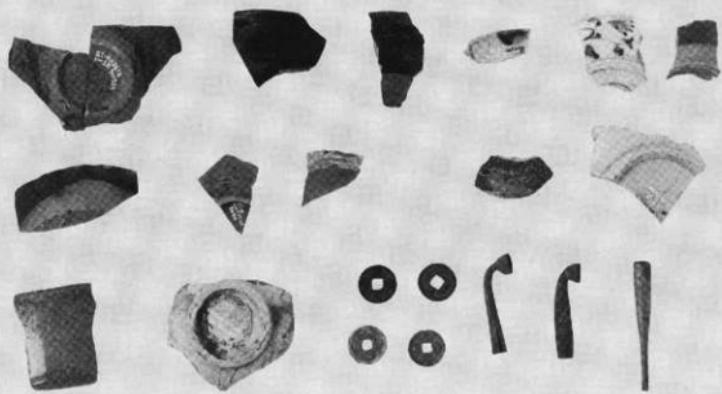
1. 珠洲

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



2. 左：土器質土器  
右：輸入陶磁器  
器外

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

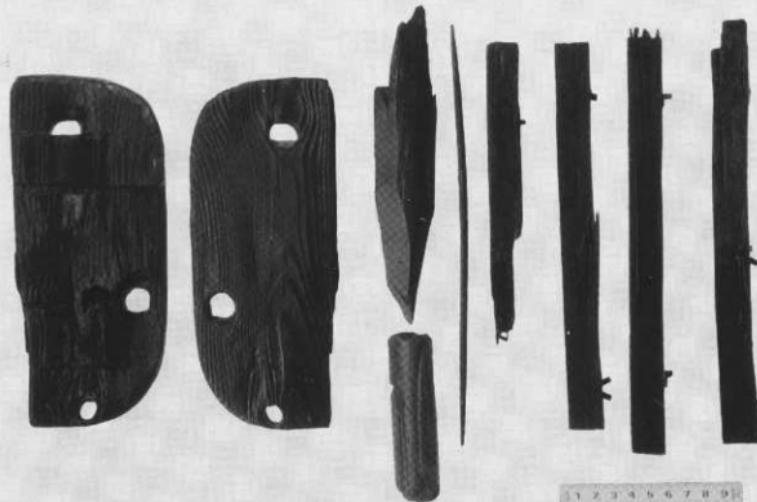


3. 近世の遺物

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

図版第9

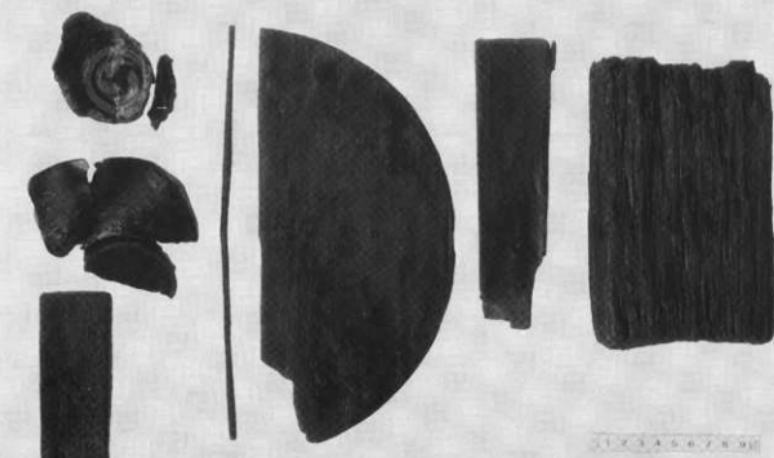
東地区用水  
敷き出土



1. 左: SD31  
右: SD32

1 2 3 4 5 6 7 8 9

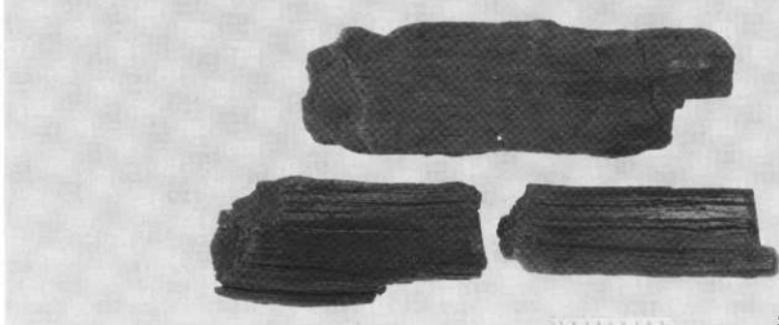
1



2. 左半分: SD32  
右: R<sub>1</sub> + R<sub>2</sub>

1 2 3 4 5 6 7 8 9

2



3. SD33

1 2 3 4 5 6 7 8 9

3

図版第10

東地区用水  
敷き出土



1 A



1 B



2



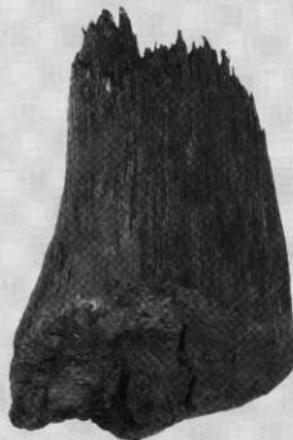
3 A



3 B



4



5 A



5 B

1.  $SD_n$   
2.  $R_l$

3.  $P_{20}$   
4.  $P_{20}$

5.  $P_{11}$

図版第11

東地区用水  
敷き出土

1.  $P_3$



1A



1B

2.  $P_2$



1C



2

3.  $P_4$



3

4.  $P_5$



4



1A



1B

1.  $P_1$



2A



2B

2.  $P_1$



3A



3B

3.  $P_4$

## **小杉町白石遺跡発掘調査概要**

---

平成4年3月

---

編集 小杉町教育委員会

発行 富山県射水郡小杉町戸破1511

〒939-03 電話 (0766)56-1511

印刷 日興印刷株式会社

---

